

# 件名標目の現状と将来

---

ネットワーク環境における主題アクセス

第5回書誌調整連絡会議記録集

2004

国立国会図書館書誌部 編集・発行

**Subject Headings Now and in Future**  
**- Subject Access in the Network Environment -**  
**The 5th Conference on Bibliographic Control**

第5回書誌調整連絡会議

平成16年9月8日(水)  
国立国会図書館 東京本館研修室

## 目 次

---

参加者一覧		2
開会挨拶	村上 正志（国立国会図書館書誌部長）	3
基調講演		
件名標目表の可能性	目録とウェブの主題アクセスツールとなりうるか	
	上田 修一（慶應義塾大学文学部教授）	4
報告 国立国会図書館件名標目表の問題点と将来	大柴 忠彦（国立国会図書館書誌部国内図書課）	20
報告 国立国会図書館件名標目表の改訂について	白石 郁子（国立国会図書館書誌部国内図書課）	28
報告 基本件名標目表のこれから	柴田 正美（日本図書館協会件名標目委員長）	41
報告 Facets on the WEB	検索 GUI における統制語彙の新たな役割と	
国立情報学研究所メタデータ語彙集におけるマルチファセット統制語彙の試み	神門 典子（国立情報学研究所教授）	47
報告 TRC における件名標目	松木 暢子（株式会社図書館流通センター）	58
質疑応答・討議	コーディネーター： 上田 修一（慶應義塾大学文学部教授）	
	司 会              ： 大柴 忠彦（国立国会図書館書誌部国内図書課）	64
注		74

## 参加者一覧

---

講師 上田 修一氏（慶應義塾大学文学部教授）

情報の伝達を主な研究テーマとし、メディア論、学術情報、大学図書館をはじめ研究対象は多岐にわたる。特に情報検索分野では、WWW の検索と画像データベースの索引・検索手法に深い関心を持つ。最近の関連分野の著作として、以下の著書・論文がある。

上田修一編, 岸田和明, 倉田敬子訳. 情報学基本論文集, 2(情報検索の方法). 勁草書房, 1998, 200p.

上田修一. 情報源としての WWW. メディア・コミュニケーション. no.51, 2001, p.42-50.

上田修一. 特集: Web による図書館サービスの可能性を探る, Web の 10 年を図書館はどう過ごしてきたか. 図書館雑誌. 99(2), 2005, p.79-81.

出席者（五十音順）

大場 高志氏（国立情報学研究所開発・事業部コンテンツ課長）

神門 典子氏（国立情報学研究所ソフトウェア研究系ソフトウェア工学研究部門教授）

柴田 正美氏（帝塚山大学心理福祉学部教授，日本図書館協会件名標目委員長）

白石 英理子氏（東京都立中央図書館サービス部資料管理課分類主題担当係長）

松本 暢子氏（株式会社図書館流通センターデータ部分類・件名担当）

百足山 昌子氏（株式会社日販図書館サービス図書情報製作部図書情報製作課分類典拠係長）

国立国会図書館

村上 正志（書誌部長）

西田 元子（書誌部主任司書）

坂本 博（書誌部書誌調整課長） 総合司会

牟越 弘美（書誌部国内図書課長）

大柴 忠彦（書誌部国内図書課課長補佐） 報告者

白石 郁子（書誌部国内図書課主題係長） 報告者

川鍋 道子（総務部企画・協力課電子情報企画室主査）

（本記録集中の所属および肩書きは、総て会議開催当時のものである。）

## 開会挨拶

村上 正志（国立国会図書館書誌部長）

本日は書誌調整連絡会議にご参加いただきまして誠にありがとうございます。

この会議も今回で第5回目を迎えました。第1回目の会議が開催された平成12年（2000年）以降、当館では平成14年度の大規模な機構再編、関西館の開館、国際子ども図書館の全面開館、NDL-OPACによる書誌データの全面公開と遠隔サービスの充実など、サービス・業務の双方において、それ以前とは質、量ともに異なる展開をしてまいりました。一方この間に、インターネット環境も進展し、知識や情報の生産、流通、利用の形にも変化が生じ、それに応じて人々が図書館に求めるもの、期待するものも以前とは変わってきています。

こうした背景を元に、書誌調整の今後の方向に大きな影響を与えそうな局面が出現しています。2004年2月に政府によるe-Japan戦略を促進するために、「e-Japan戦略 加速化パッケージ」が公表されました。その中で、政府コンテンツのデジタルアーカイブの構築と一般利用の拡大に、当館が中心的役割を果たせるように全府省が協力体制を作るという目標が建てられました。一方、当館の納本制度審議会ではネットワーク系出版物の納本に関する審議を続けており、平成16年度内には成案を得て、法律の改正に着手することになっています。

このような状況の中で書誌調整の今後の展開を試みようとしたときに、ネットワーク環境下における書誌調整の基本的な枠組み作りを本格的に始める時期に来ていると考えます。図書館では、紙・マイクロフィルム等の有体資料については、収集、蓄積、組織化の経験を積み重ねてきましたが、ネットワーク系の電子情報の収集や組織化は未経験の分野であり、当面は試行錯誤が続くのではないかと考えています。こうした新しい状況に新しい手法を用いる試みや専門的な研究が進みつつある現在、先行事例に関する知見や研究成果を関係者間で共有し活用することが、利用者の求める書誌サービスの発展を支える基礎であると認識しています。

本日の会議では「件名標目の現状と将来 - ネットワーク環境における主題アクセス」という重要でありかつ時宜に適ったテーマを設定しています。人々をいかにして適切な資料や情報に結びつけるか、検索エンジン全盛の時代における件名標目の役割は何か、こういった問題に関する報告と活発な議論を通じて、本日の会議の成果が上がることを期待して、開会の挨拶といたします。

## 基調講演

### 件名標目表の可能性 目録とウェブの主題アクセスツールとなりうるか

上田 修一（慶應義塾大学文学部教授）

件名標目表をテーマに取り上げるのは今や国立国会図書館しかできないことのように思われます。「主題探索」という話はどこでもやれることですが、テーマを「件名標目表」に限定した会議というのは、もはや持てないと思っていました。国立国会図書館が件名標目表を改訂するということは、停滞していた時期があっただけに大変喜ばしいことと思います。

日本では、60年代から70年代が公共図書館の時代、80年代が大学図書館の時代、90年代は電子図書館といわれていましたが、先ほど村上部長がおっしゃいましたように、2000年代は、国立国会図書館の攻勢の大変目立つ時代になってきているという感を強く持っております。お世辞でも何でもなく、大変結構なことだと思います。

#### 1. 件名目録の現状

##### 1.1 オンライン目録における件名

### オンライン目録における件名

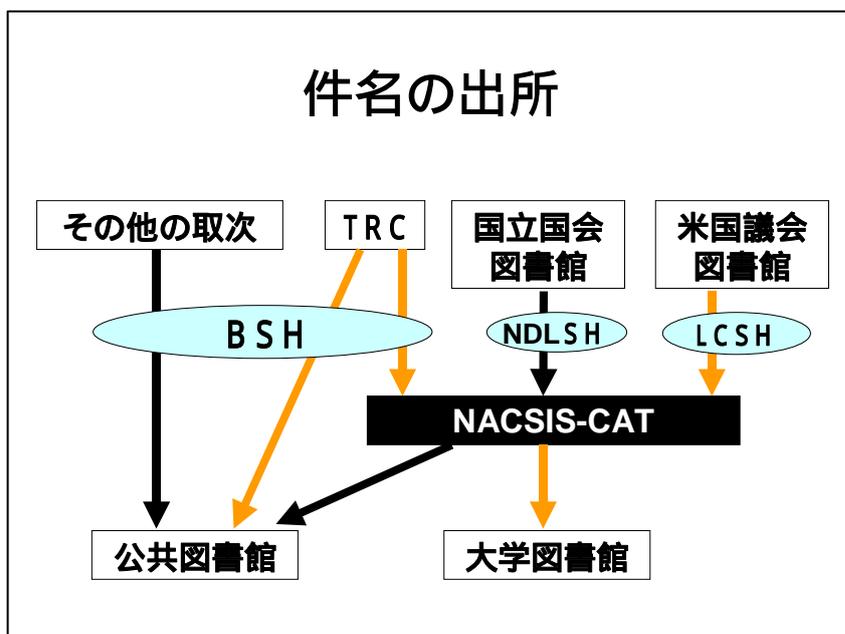
	館数	検索項目あり		件名表示	
大学図書館(神奈川県)	18	16	88.9%	14	77.8%
都道府県立図書館	25	23	92.0%	21	84.0%
市町村立図書館(富山県)	16	15	93.8%	15	93.8%
計	59	54	91.5%	50	84.7%

件名は標準的な検索項目となっている。

これはウェブで公開されているオンライン目録における「件名」について分析したものです。大学図書館、都道府県立図書館、それから市町村立図書館ですが、市町村立については数を合わせる都合で富山県をとりあげています。これはウェブのOPAC検索画面で件名が項目として独立しているかどうかを示したもので、9割以上が独立した項目となっていることがわかります。

それから、検索結果に「件名」の表示があるかどうかですが、これは若干少なくなりますが、それでも 84.7%あり、件名を標準的な検索項目として図書館が使っている、つまりオンライン目録で検索項目にしなければいけないと考えているということがわかります。

## 1.2 件名はどこから来るのか



この図は件名はどこから来るのかを示すものです。独自に目録をお作りになっている図書館もありますが、基本的に目録はどこからデータが来るということになります。国立情報学研究所の NACSIS-CAT を利用している大学図書館、それから公共図書館のごく一部には、国立国会図書館件名標目表 (NDLSH) と米国議会図書館件名標目表 (LCSH) と、それから図書館流通センター (TRC) のデータが行くということを表しています。またほとんどの公共図書館は直接 TRC や取次のデータが行くということになっていて、結局これらが出所になっています。

どのような件名標目表が使われているかですが、TRC や取次では基本件名標目表 (BSH) が使われています。それから国立国会図書館は NDLSH を使い、米国議会図書館 (LC) は LCSH、もちろん NACSIS-CAT の場合、必ずしも米国のものだけではありませんが、基本的にはこのようになっています。

## 1.3 件名の状況

これは 15 点の著作の件名を調べたものです (図 1 参照)。著作数が多く、ほとんど翻訳されていて、ある程度分野がはっきりしているという理由で、スティーブン・グールド (Stephen Jay Gould) の著作を 15 点選びました。これらについて国立国会図書館の NDL-OPAC でどういう件名があるかを見ました。

図1. スティーブン・ゲールドの著作15点

書名	出版年	国立国会図書館	NACSIS-CAT		米国議会図書館	京都大学 附属図書館	大阪市立図書館
			翻訳書	原著			
ダーウィン以来	1984	進化;進化論	NDLSH:進化; NDLSH:進化論	Evolution -- History ; Natural selection -- History	Evolution (Biology)-- History.;Natural selection--History.	NDLSH:進化; NDLSH:進化論	進化論
個体発生と系統発生	1988	個体発生;系統学(生物学)	BSH:発生学;BSH:進化論;NDLSH:個体発生;NDLSH:系統学(生物学)	Phylogeny ; Ontogeny	Phylogeny ; Ontogeny	BSH:発生学;BSH:進化論;NDLSH:個体発生;NDLSH:系統学(生物学)	発生学;進化論
人間の測りまちがい	1989	知能検査;頭蓋計測;能力テスト	BSH:頭蓋計測;BSH:社会的差別;NDLSH:知能検査;NDLSH:能力テスト	Man. Intelligence. Measurement, to 1980 ; Intelligence tests -- History	Intelligence tests--History.;Ability--Testing--History.;Personality tests--History.;Cranometry--History.	BSH:頭蓋計測;BSH:社会的差別;NDLSH:知能検査;NDLSH:能力テスト	頭蓋計測;知能;社会的差別
フラミンゴの微笑	1989	進化論	BSH:進化	Natural history -- Addresses, essays, lectures	Natural history.	BSH:進化	進化論
時間の矢・時間の環	1990	地質学 -- 歴史;地質学 -- 歴史	BSH:地質学 -- 歴史;NDLSH:地質学 -- 歴史	Geological time -- Study and teaching -- History ; Burnet, Thomas, 1635?-1715. Telluris theoria sacra ; Hutton, James, 1726-1797. Theory of the earth ; Lyell, Charles, Sir, 1797-1875	Geological time -- Study and teaching -- History ; Burnet, Thomas, 1635?-1715. Telluris theoria sacra ; Hutton, James, 1726-1797. Theory of the earth ; Lyell, Charles, Sir, 1797-1875	BSH:地質学 -- 歴史;NDLSH:地質学 -- 歴史	地質学-歴史
嵐のなかのハリネズミ	1991	読書	NDLSH:読書;BSH:科学	Biology ; Biology -- Book reviews	Biology ; Biology -- Book reviews	なし	科学
ワンダフル・ライフ	1993	進化	BSH:化石;BSH:動物	Invertebrates, Fossil -- British Columbia -- Yoho National Park ; Paleontology -- Cambrian ; Paleontology -- British Columbia -- Yoho National Park ; Burgess Shale (B.C.) ; Paleontology -- Philosophy ; Contingency (Philosophy) ; Yoho National Park (B.C.)	Invertebrates, Fossil--British Columbia--Yoho National Park.; Paleontology--Cambrian.; Paleontology--British Columbia--Yoho National Park.;Paleontology--Philosophy.; Contingency (Philosophy); Burgess Shale (B.C.); Yoho National Park (B.C.)	BSH:化石;BSH:動物	化石;動物
がんばれカミナリ竜	1995	進化	BSH:進化論	Natural history -- Popular works ; Evolution -- Popular works	Natural history--Popular works.;Evolution (Biology)--Popular works	BSH:進化論	進化論
八匹の子豚	1996	進化	BSH:進化論	なし	Natural history--Philosophy--Popular works.;Evolution (Biology)--Popular works.	BSH:進化論	進化論
パンダの親指	1996	進化論	NDLSH:進化論	なし	Evolution (Biology)--History.;Natural selection--History.	NDLSH:進化論	進化論
ニワトリの歯	1997	進化論	BSH:進化論; NDLSH:進化論	Organisms. Evolution. Theories ; Evolution	Evolution (Biology)	BSH:進化論;NDLSH:進化論	進化論
暦と数の話	1998	暦;聖書年代学	BSH:暦	Two thousand, A.D ; Calendar -- Social aspects	Two thousand, A.D ; Calendar -- Social aspects	BSH:暦	暦
フルハウス	1998	進化	BSH:進化論	なし	Evolution (Biology); Natural history.; Excellence.; Nature.	BSH:進化論	進化論
干し草のなかの恐竜	2000	進化	BSH:進化論	Evolution (Biology) ; Natural history	Evolution (Biology) ; Natural history	BSH:進化論	進化論
ダ・ヴィンチの二枚貝	2002	進化	BSH:進化論	Natural history ; Evolution (Biology)	Natural history ; Evolution (Biology)	BSH:進化論	進化論

それから NACSIS-CAT に関しては、翻訳書と原著にどのような件名がついているかを見ました。米国議会図書館については LC のウェブの目録で確認をしました。京都大学は大学図書館の一つの例で、NACSIS-CAT から来ているものになります。それから大阪市立図書館は大変活発な市立図書館で、ここにあるものを全部買っているわけで、実は都道府県立図書館でも全部買っているところはそれほどないので、かなり質の高い集書をしている図書館です。これらについて分析をいたしました。

## 件名の状況(1)

- 件名目録作業を行っているのは、国立国会図書館、TRC など取次、一部の大学図書館である。
- 大多数の公共図書館、大学図書館は自館では件名を付与していない。
- NACSIS-CAT 参加館では、総合目録ファイルの件名をそのまま取り込んでいる。

和書では BSH と NDLSH が混在している。

## 件名の状況(2)

- NACSIS-CAT の総合目録ファイルでは、洋書では、LCSH をコピーして用いるが、取り込まれない場合や一部削除される場合がある。
- 公共図書館では、取次などが作成した件名をそのまま利用している。
- 大学図書館でも公共図書館でも、件名のほとんどは BSH(+ ) である。
- 件名の付与されていないレコードはかなりある。

先ほど申し上げたように、件名目録作業を行っているのは国立国会図書館、TRC や取次と、それから一部の大学図書館、公共図書館になります。ですから、大多数の公共図書館、大学図書館は自館では、かなり以前から、自分たちでは件名を付与していません。それから、NACSIS-CAT と京都大学附属図書館を見ると NACSIS-CAT の参加館では総合目録ファイルの件名をそのまま取り込んでいるということがわかります。日本語の分だけですが、大体はこのようになっているということがわ

かります。

ただ、件名を落としているという例もあり、これが意図的なのかどうかはよくわかりません。NACSIS-CAT の場合は、NDLSH と BSH が混在して入ってきます。もちろん区別はついていますが、NACSIS-CAT の参加館では、自分のところのオンライン目録では何の区別もなく、両方を出しているというところは数多くあります。つまり、これは NDLSH の件名だ、あるいは BSH の件名だということが、利用される場で全然意識されない、2 系統のものが混在しているという状況があるということです。

NACSIS-CAT の総合目録ファイルでは、洋書では LCSH をコピー・カタログングしていますが、取り込まれない場合や一部削除される場合があるというのは、これは「米国議会図書館」と、「NACSIS-CAT の原著」の項を突き合わせて見ていただければわかります。最初の二つまでは同じですが、三つ目の『人間の測りまちがい』という本に関しては削られています。大多数は同じですが、削られているものがあるし、あるいは「なし」というのが下のほうに三つほどあります。つまり件名を取り込まずに作られているものがあるということになります。このように、元にあっても NACSIS-CAT でなくなって、さらに個々の図書館が落としてしまうこともありうるだろうということになります。

公共図書館では取次などが作成した件名をそのまま利用しています。大阪市立図書館の件名は、TRC のホームページ等、それから NACSIS-CAT の TRC ファイルで確かめましたが、全て TRC から来ています。そういうことになると、大学図書館でも公共図書館でも実は件名のほとんどは BSH プラスアルファ、つまり TRC が BSH だけではないという意味でプラスアルファがあります。したがって NDLSH のシェアというのはレコード単位の話ではありますが、13% ぐらい、10% から 15% の間であると言えます。

### 件名の状況(3)

- 国内では、1点に付与される件名数が少ない。  
洋書の場合は、平均2.6件のLC件名が付与されているが、和書(翻訳書)では、NDLSHは1.4件、TRCは1.2件である。
- LCSHでは細目つき件名が多い。  
付与されたLCSHの半数(19/38)は、細目つきの件名であるが、NDLSHは1割(2/20)、TRCは1件(1/19)である。

それから、件名の付与されていないレコードがかなりあると予想されます。もう一つ、もっと細かい話になりますが、洋書と比べて国内では1点に付与される件名数は少ないということが言えます。洋書の場合は平均2.6件のLC件名が与えられていますけれども、その翻訳書では、NDLSHが1.4件、TRCが1.2件と約半分です。

それからLCSHでは細目付きの件名が多いことがわかります。付与されたLCSHの半数、38件のうち19件は細目付きの件名ですが、NDLSHでは1割、TRCつまり、BSHでは1件であります。ですから、細目付きの件名はLCSHでは多用されているけれども、日本ではそれほどでもないということになります。

## 2. 件名標目表の概況

### 2.1 件名標目表の背景

	国立国会図書館件名標目表(NDLSH)	基本件名標目表(BSH)	米国議会図書館件名標目表(LCSH)
第1版	1964年	1956年	1909年
経緯	第2版(1973年), 第3版(1980年), 第4版(1986年), 第5版(1991年)	第2版(1971年), 第3版(1983年),	第2版(1919年),第3版(1928年),第4版(1943年),第5版(1948年),第6版(1955年),第7版(1966年),第8版(1975年),第9版(1980年),第10版(1986年),第11版(1988年)以後毎年改訂版を刊行
最新版	第5版(1991年)	第4版(1999年)	第26版(2003年)
標目数 (主標目数)	17,133件	7,847件	約25万件
標目の排列	訓令式ローマ字 アルファベット順	五十音順	アルファベット順
構造		階層構造	階層構造
ウェブ	ウェブでの参照可		ウェブでの参照可

これは、NDLSH、BSH、LCSHの比較です。国立国会図書館件名標目表が1964年にできて、現在第5版ですが、これについては、後ほどお話がありますが、今度改訂なさるといわけですね。これがウェブで公開され、NDL-OPACの検索補助として使うことができ、大変、便利になりました。印刷版は、訓令式ローマ字アルファベット順というわかりにくい排列になっています。これに関しては後ほど申し上げますけれども、なかなか興味深いことだと思います。

BSHは、5年前に第4版が出されました。ここでシソーラス構造というのを採用しています。

LCSHは、1998年にLCSHアニバーサリーという1世紀のお祝い事が行われ、レッドブックという、赤いLCSHの本をかたどったケーキが出て、みんなで食べたという記録があります。実際に第1版ができたのは1909年ですが、1898年というのはLC全体が辞書体目録に移行した年なんですね。そこを基点と意識しているということになります。LCSHは25万件あって、今はシソーラス構造になっ

ているし、それからウェブで参照，ブラウジングも可であり，毎年改訂版が出ているという状況であります。

## 件名標目表の背景

- 辞書体目録
- アルファベット順
- カード目録
- キーワードの伝統

件名標目表がなぜ出来てきたかということに関しては，その歴史が書かれた本を見ますと，その本の一番最初にあるのは，アルファベット順の排列の話となっています。つまり，言葉を並べて探していくのに，アルファベット順を使うというのは，今は当たり前のことですが，最初は革新だったわけです。次に，それによって辞書体目録を作ろうという発想が出てきました。つまり文字で表される，著者，書名，それにもう一つ件名を表すものを混在させた辞書体目録が，これからの目録であると認識された。そこで，件名標目表を作っていくという発想が生まれました。

また，カード目録が同じ頃に生まれるなど，いろいろな新しいことが19世紀末に起こってきて，その背景の中から件名標目表が生まれてきたということになります。

もう一つ，目録の教科書を書いているチャン<sup>1)</sup>によれば，件名目録の起源は米国に限らず，元々，書名目録でキーワードという一種のキーワード，書名では足りない言葉を補うものを付加してきたことにあっております。

### 2.2 日本の件名目録

このようにして件名標目表が出来上がってきたわけですが，日本では件名目録は，カード目録時代には，ほとんど作られてこなかったわけです。調査もありますが，極めて作成率が低いということになります。例外的に医学分野と音楽分野は，件名目録に熱心に取り組んでいます。医学図書館の場合は米国の影響でしょうが，カード目録でも件名目録がありました。音楽分野では現在でも音楽の件名標目表を作っています。

なぜカードの件名目録が作られなかったかについて，俗説ですが，日本語では書名目録が件名目録の代わりをするという説がありました。つまり日本語のタイトルでは例えば『経済学入門』『経済学概説』というように「経済学」という言葉が先に来るので件名と同じになるというわけです。でも，英語では「introduction」といったような語が書名の冒頭にくることが多く，「economics」が

最初に来ない。そこで、英語圏では件名目録が必要であったというもっともらしい話があります。これについて念のために確かめてみました。

**「経済学」「economics」を書名に持つ本の調査**

刊行年	和図書			洋図書		
	冊数	「経済学」で始まる書名	比率	冊数	「Economics」で始まる書名	比率
1903年	11	7	63.6%	8	0	0.0%
1928年	53	22	41.5%	43	5	11.6%
1953年	87	33	37.9%	38	8	21.1%
1978年	121	29	24.0%	127	23	18.1%
2003年	169	29	17.2%	144	20	13.9%
平均	441	120	27.2%	360	56	15.6%

これは国立国会図書館のオンライン目録、NDL-OPACで調べた結果ですが、「経済学」と「economics」を書名に持つ本について、和図書と洋図書を検索いたしました。「経済学」で始まる書名と「economics」で始まる書名がどれだけあるかを見ました。なかなか興味深いです。昔は確かに日本語の本で「経済学」という言葉を含んでいると、書名の最初に出てくる本が多かったんですね。25年おきに調べていますけれども、次第に減ってきています。一方、英語のほうは一定です。十数パーセントしかないということにして、昔は、今申し上げたようなことが言えなくなかったらしいですね。今はもうそんなことは、関係なくなったということになります。

### 3. 目録の変化と件名標目表

#### 3.1 目録の変化

さて、コンピュータ利用とネットワーク化は目録作成と利用に大きな変化をもたらしました。今さら申し上げるまでもありませんけれど、目録へのコンピュータ利用とネットワークが重なり合っ、個別の図書館が行わなくても1個所で作った目録データをそのまま利用するという集中目録作業と、NACSIS-CATで行っている分担目録作業のいずれかで目録を作成するようになりました。

利用面ではカード目録からオンライン目録への移行があって、今やオンライン目録はこの図書館にもあります。また、館内利用からウェブへ、つまり自宅でも目録が使えるという時代にもなりました。目録の利用という面でも、コンピュータの及ぼした影響は大変大きいということになります。

また、目録対象の多様化というのも、件名に多少かわりがあると思います。つまり、本や雑誌以外の多様なメディアに対しても件名を付けるという問題もあります。

## 目録の変化

- コンピュータ利用とネットワーク  
集中目録作業と分担目録作業による目録作成  
カード目録からOPACへ  
館内利用からウェブへ
- 目録対象の多様化
- 目録対象の構造的把握  
FRBR  
書誌階層

もう一つ最近感じる変化は、今話題になっている目録対象の構造的把握です。新しい目録規則では、こうした考え方が反映されるのだらうと思います。『日本目録規則』は書誌階層という形で階層的な構造を理解させようという方向に移行しているわけですが、もう一つFRBR<sup>2)</sup>と呼ばれる、IFLAでやっております四つの階層による目録対象メディアのとらえ方があります。この中で、件名標目をどのレベルで与えるのかといえ、例えば、先ほど例で使った翻訳の場合があります。翻訳書では、原著も翻訳されたものも同じ件名であったほうが、一貫性があるだらうと思います。それを論理的に行っていくには、やはりFRBR的な考え方が必要だらうと思います。

### 3.2 オンライン目録のもたらした変化

## オンライン目録のもたらした変化

- 目録利用の増加
- 主題探索の増加
- 主題探索の失敗(ベイツ, 2003)
- 非力な件名標目表

オンライン目録がもたらした大きな変化として、オンライン目録になったことにより目録の利用が増加したことが挙げられます。今までほとんどの人はカード目録や冊子体目録を使っていませんでした。

主題探索の増加が見られるということが、いろいろな目録利用調査で言われています。主題探索と既知文献検索をどのように分けるかという点に課題はあるものの、一般的な傾向としては、主題探索が増加しているという報告があり、今までは主題探索は、全体の探索の20%か30%だったのが50%ぐらいになっていると言われています。ただし、主題探索の失敗、つまり利用者の主題探索がうまくいっていないというも、定説でして、これについてベイツがLCの依頼で報告書を提出しています<sup>3)</sup>。その中で今までのいろいろな調査結果をレビューして、要するに主題探索は失敗なんだと言っています。その背景としては件名標目表が非力だからということが、これも定説になっております。このレポートは国立国会図書館の橋詰さんが『現代の図書館』で紹介しています<sup>4)</sup>。

### 3.3 なぜ件名は機能しないのか

#### なぜ件名は機能しないのか(1)

##### ●利用者

「最少努力の法則」(マン)

面倒な手順は踏まない。

利用者教育やHELP機能の無力さ

サーチエンジンへの慣れ。

日本語しか使わない。

#### なぜ件名は機能しないのか(2)

##### ●索引と検索の仕組み

##### ●オンライン目録では、オンライン検索システムをそのまま導入している。

事後結合索引法(構文なし)

完全照合とブール演算子

なぜ件名が機能しないのかということですが、利用者側の要因が一つあります。トーマス・マンという米国議会図書館の方がお書きになった本<sup>5)</sup>の中で、「最少努力の法則」という経験則を述べています。要するに何かを探すときに、「研究者」は手元の資料しか使わないということです。つまり本来は網羅的に探さなければならないのに、そんなことはしない。手近の資料で見つければそれで満足してしまうということです。それを拡大すれば、利用者は面倒な手順は踏まないという話になってきます。図書館は利用者教育やHELP機能の提供を熱心に行っているわけですが、面倒なことを厭う利用者は、ほとんどHELPを見たりはしないし、利用者教育を行おうとしても、参加者は少なく、実際の利用とはさほど結びつかないこととなります。

また、サーチエンジンへの慣れという現状もあります。Google や Yahoo! の検索方法で検索を理解している。ですから、検索ページに向かえば、言葉を一つ入れれば何か結果が出てくるだろうと思っています。

それに検索の時には、日本語しか使わないというのも重要な事実です。日本の本に米国議会図書館件名標目表の件名を英語で付けても、それが使われる可能性はほとんどありません。

現在の環境下で件名標目が機能を発揮できないのは、索引と検索の仕組みに起因する問題があるためです。オンライン目録の検索システムは、それまであったオンラインデータベース検索システムを目録データに当てはめたものです。オンラインデータベース検索システムは、単語を「and」や「or」で組み合わせた完全照合方式を使っています。つまり、ある単語が、あるかないかを調べるという方法であり、件名の細目のような「構文のある単語群」は前提としていません。そうした環境の中で構文を持った件名標目表を扱おうとするわけですから、それは無理ということになります。

### 3.4 件名による探索の改善の試み

#### 件名による探索の改善の試み

- FAST(Faceted Application of Subject Terminology)
- ベイツの提案  
利用者語彙  
書誌ファミリー
- 三次元あるいは視覚に訴える語彙表示

件名による探索の改善の試みとして、FAST<sup>6)</sup>というのがありますが、これは、神門先生がお話しになるとお思いますので、ここでは説明を割愛させていただきます。

ベイツが提案している利用者語彙<sup>3)</sup>についてですが、利用者が検索したログの中から取ってきた

言葉を、うまく組み合わせて使えないだろうかという発想のようです。書誌ファミリーというのは、これは先ほどの翻訳の原書と翻訳書の関係や、ある人物が書いた著作と、その人物について書いた著作といったように関連する著作をグループ化して、ファミリーを作って、それを検索に役立てようというものです。これは大変面白いし、かなり書誌的な面の知識が必要なわけですから、図書館員にとっては適した仕事だと思います。共同分担作業で、著作間のリンク付けを行うのはできないことではないと思います。

また、情報検索分野で行われている語彙を三次元で表示したり、あるいは視覚に訴える形で表示する方法があります。言葉を入力するとその検索結果がグループ化されて、例えば、関連の深い文献は中央に球の形で表示されるといったことです。情報処理分野の方々は、画像化すれば、インターフェースが向上するという発想をお持ちのようで、様々なものが試みられ、これを導入したサーチエンジンもありましたが、全く使われなかったようです。

## 4. 件名標目表の論点

### 4.1 件名標目表はどこが作成維持すべきか

件名標目表には、まず、件名標目表はどこが作成維持すべきかという論点があります。日本では国立国会図書館と日本図書館協会とが作っています。米国の場合は、LCSHは議会図書館が作っています。一般に、図書館協会あるいは国の中央図書館が担当するわけですが、毎日実際の本を見て目録を作成して、件名を付与している機関が、件名標目表を作り維持するべきではないかと思います。つまり、そうした毎日の作業、本を見て目録をとることがないと、感覚が働かないだろうと思います。そうでなくて頭で考えた件名標目表というのは、literary warrant<sup>7)</sup>という面から言うところあり得ないわけです。ただし、これも議論があるところだろうと思います。

### 4.2 学校図書館向けなどの簡易版は必要か

学校図書館向けなどの簡易版が必要なのかということが次の論点です。つまり大変詳しいものと、それから簡易版があって、学校図書館などでは簡易版を使えばいいじゃないかということです。件名標目表から知識を得るということもありうるのですから個人的には簡易版は不要と考えます。けれども、米国では学校図書館用のシアーズ・リスト<sup>8)</sup>が簡易版の役割を果たしているわけで、今でも3年おきぐらいに改訂されて存在しているのをみると、学校図書館向けの件名標目表も必要なのかもしれません。

### 4.3 国内でLCSHの翻訳版を用いるべきか

もう一つ、国内でLCSHの翻訳版を用いるべきかどうかという問題があります。つまり、もうNDLSHもBSHも捨てて、LCSHがグローバル・スタンダードなんだから、LCSHの日本語版を使えばよいではないかという極端な議論も、当然ありうるだろうと思います。そうではないと思います。LCSHの件名を見ていて、これは本当にグローバルなのか、やはり米国でしか通用しない件名が多いのではないかと思います。世界各国でも翻訳版をそのまま全部用いているところなどはなくて、LCSHを使っ

ている国でもアレンジメントしています。そうなると翻訳版を作るメリットや使う利点は薄れてしまいます。全くなければ仕方ないでしょうが、すでにあるのだから、これらを良くしていくのが本筋でしょう。

#### 4.4 階層構造は必要か

細目は必要か、階層構造は必要かについてですが、細目に関して、どちらかといえば不要という見解です。階層構造に関してもネガティブです。なぜなら検索のときに、複雑な構造を持たせるほど、その利用が難しくなるからです。先ほどの「最少努力の法則」にもありましたが、利用者は面倒なことをしない傾向があります。今のウェブのサーチエンジンに慣れてしまった利用者には、統制語彙を学べということだけでも負担をかけるのに、さらに細目の規則などを強いるのは無理です。ですから単純な階層構造にしてしまったほうがよいのではないかと思います。多分、そうした乱暴な話はなかり、細目を取り去ったら件名標目表ではなくなってしまうというご意見もあると思いますが、件名標目表を生きながらえさせるにはそうせざるを得ないと思います。

#### 4.5 ウェブに応用できるか

件名標目をウェブに応用できるかという課題があります。OCLCではLCSHをウェブのメタデータのデータベースに利用しているわけですし、国立情報学研究所でも同じようなことをしています。しかしながら、LCSHの複雑な細目規則と階層構造を維持したままで、だれかに付与させ、しかも検索させるというようなことは、いささか難しいのではないかと、ウェブで使うためには簡素化せざるを得ないと思います。

#### 4.6 フィクションにも件名を付与すべきか

### ジェフリー・アーチャー『運命の息子』

Sons of fortune / Jeffrey Archer.

- Twins--Fiction.
- Brothers--Fiction.
- Infants switched at birth--Fiction.
- Vietnamese Conflict, 1961-1975--Veterans--Fiction.
- Banks and banking--Fiction.
- Politicians--Fiction.
- Hartford (Conn.)--Fiction.

Genre/Form

- Domestic fiction.
- Psychological fiction.

最後に、フィクションにも件名を付与すべきかという問題があります。これはジェフリー・アーチャー (Jeffrey Archer) というベストセラー作家の『運命の息子』という本に対して、LC が付与した件名です (p.16参照)。決して全てのフィクションに対して件名標目が付けられるわけではないのですが、見ていただくとわかりますが、中身を全部読まないで付与できないような件名が付いています。お読みになった方はなぜこういう件名が付いているか、おわかりになるわけですか。そこまでして件名を付けなくては行けないのかというご意見もあるかと思いますが、私は小説に分類や件名を与えるということを行ってよいと思っております。小説などの主題探索はこれまでも試みられてきましたが、是非、実現させたい課題です。

#### 4.7 各国の件名標目表の状況

これは各国の件名標目表の状況を調査した表です。国名のアルファベット順でドイツまでの例ですが、ここで件名標目を付けてないのは、デンマークとフィンランドという二つの国だけです。そのほかは何らかの形で件名標目を持っている。つまり、国立図書館、中央図書館で件名標目表を持って、件名標目を与えているのが、標準的な姿であるということになります。独自の件名標目表を持っている国と、ブラジル、チェコ、それからフランスに関しては、LCSH の翻訳も併用、つまり LCSH を翻訳して、自国に拡張した形で使っているようです。やはり、このように国立国会図書館が件名標目表を維持していくということが中央図書館としての役割に成ることになると思います。

各国の件名標目表の状況		
中央図書館の目録で用いられている件名標目		
国	言語	件名標目
アルゼンチン	スペイン語	キーワード
オーストラリア	英語	LCSH(英語)
オーストリア	ドイツ語	独自の件名標目表
ベルギー	フランス語, オランダ語, ドイツ語	LCSH(英語)
ブラジル	ポルトガル語	独自の件名標目表
カナダ	英語, フランス語	LCSH(英語)
チェコ	チェコ語	独自の件名標目表
デンマーク	デンマーク語	なし
エストニア	エストニア語, ロシア語	独自の件名標目表
フィンランド	フィンランド語, スウェーデン語	なし
フランス	フランス語	独自の件名標目表
ドイツ	ドイツ語	独自の件名標目表

### 5. 今後

#### 5.1 国立国会図書館件名標目表の課題

では、国立国会図書館の件名標目表の課題としてどういうものがあるのかを考えますと、まずは、語彙を増加しなければいけないと思います。10万語というのは、これはNDCの分類などでは、選書

に役に立つのは上から 5 桁目ぐらいの分類記号です。上から 3 桁ぐらいたと多すぎてどうしようもないということになって、5 桁目ぐらいでの特定性、具体性があると考えます。ですから 10 万語を目指してほしいと思います。

それから、当然ですが新語の迅速な追加を行ってほしいと思います。今回のように十何年もたって改訂するのではなくて、毎年改訂をしたっていいじゃないか、もう冊子体である必要はなくなったのだから、いくらでも新しい言葉を追加していいのではないかと思います。

## 国立国会図書館件名標目表の課題

- 語彙の増加  
10万語
- 新語の迅速な追加
- 類義語のコントロール
- 件名データの配布システム

類義語のコントロールは、これはシソーラスの大きな機能であり、欠かすことはできません。しかし、階層構造について労力を割くのは前述のようにやや疑問があります。

それより、件名データの配布システムを考える必要があります。つまり、NDLSH がなぜシェアが小さいかといえば、配布システムがうまくないからです。これは構造的な問題であり、国立国会図書館ではどうしても出版から書誌データの作成まで一定期間を要します。現在は、書誌データの作成から提供まで平均 5 週間を目標とされているということで、以前の 3 か月より改善されたわけですが、それでは、図書館では使われまいと思えます。私が考えるのは、国立国会図書館は TRC や日販と一緒に件名標目表を作り、TRC や日販を通じて配布したらどうかというやや乱暴な案を持っています。そうでもしないと、一所懸命作ったところで、あまり使われまいということになってしまいます。

### 5.2 件名標目表の使命

件名標目表は図書館の主題に対する関心と取り組みを明示する機能を持っています。分類表も同様ですが、件名標目表のほうが主題に対する意欲を鮮明に表すことができます。ですから件名標目表というのは、図書館にとってはかなり大きな存在で、この機能を無くすと図書館というものの存在意義に影響を及ぼします。

最後に、利用の実際における件名標目の効用について申し上げますと、それは検索語の拡張で有

用であると言えます。今、一部の大学図書館や公立図書館のOPACでは件名標目にリンクがなされています。そのため、検索結果があれば、それに関連するものをリンクをたどって探すことができるわけです。つまり、件名標目をクリックすることによって、主題探索の拡張ができるということです。これが件名標目表利用の現代的な姿であり、充分役立っていると思います。

## 件名標目表の使命

- 図書館の主題に対する関心と取り組みを明示する機能。
- 最新の状況にも対応しているという姿勢。  
「911 Terrorist Attacks, 2001」というLCSH  
実務面での効用。  
OPACの検索結果から拡張する際のリンク  
としての使用。

## 報告

### 国立国会図書館件名標目表の問題点と将来

大柴 忠彦（国立国会図書館書誌部国内図書課課長補佐）

#### 1. NDLSHの歴史

##### NDLSH概史

第1版 昭和39年(1964年)	約 9,000件
第2版 昭和48年(1973年)	約17,000件
第3版 昭和55年(1980年)	約19,800件
第4版 昭和61年(1986年)	約21,000件
第5版 平成 3年(1991年)	約22,500件
以後……	

平成16年(2004年)・改訂作業に着手

国立国会図書館件名標目表の問題点と将来ということで報告させていただきます。

『国立国会図書館件名標目表』(NDLSH)は、国立国会図書館(NDL)の目録に適用する件名標目を収録した表です。昭和39年(1964年)に第1版を刊行し、その後版を重ね、平成3年(1991年)の第5版を最後に刊行はストップしていましたが、現在、ようやく、改訂版公開へ向けての作業に着手し、作業を進めているところです。この改訂内容の詳細につきましては、この後、国内図書課主題係長の白石から報告があります。私はこの機会に、まずNDLSHのこれまでの簡単に振り返り、次にこれまでのNDLSHの問題点が何であったのかを述べたいと思います。いわば、NDLSHについての自己批判です。その次に、NDLSHについての将来的な展望を述べ、これまでの問題点と将来展望との狭間に、今回のNDLSH改訂を位置付けてみたいと思います。

国立国会図書館が件名標目付与作業を開始したのは、和漢書については昭和24年(1949年)4月、洋図書については和書に先行すること7ヶ月前の昭和23年(1948年)9月でした。

和漢書については、現在の『基本件名標目表』(BSH)の前身である『日本件名標目表』をベースとし、『米国議会図書館件名標目表』(LCSH)などを参照しながら、訂正・拡充しつつ作業を行っていました。やがて、当館独自の件名標目表が必要との機運が高まり、幾多の検討を重ねたうえ、昭和39年(1964年)、NDLSH第1版を編集刊行、同年より和漢書への適用を開始しました。

洋図書には、当初、LCSH、ついでシアーズ件名標目表<sup>8)</sup>、その後LCSHを適用と、幾たびの変遷を経た後、洋図書にも日本語の件名標目表を用いるべきとの機運が高まり、NDLSH第1版が完成した

のを契機に、同じく昭和 39 年（1964 年）に適用を開始しました。

その後、順次版を重ねてきました。各版の刊行年と収録数をご覧のとおりです（p. 20参照）。収録数には参照語も含まれます。そして、第 5 版を平成 3 年（1991 年）に刊行し、これを最後に改訂版は出ていません。これ以後は、その後に新設された件名標目をお知らせしてきたにすぎません。そして、ようやく 2004 年から NDLSH の改訂作業に着手することとなったわけですが、今回の改訂作業は、単に第 5 版刊行後に新設した件名標目を追加収録することとどまりません。件名標目表全体の見直しを、可能な限り行おうとするものです。改訂作業は現在進行中であり、いましばらく続くものですが、10 月、「暫定版」という形での公開を予定しています。

## 2. NDLSHの問題点—整理のための枠組み

### NDLSHの問題点—整理のための枠組み

- semantics (意味論): 「ことば」とその意味の関係
- syntax (統語論) : 「ことば」と「ことば」とのつながり方
- pragmatics (語用論): 「ことば」とその使用者との関係

さて、話を NDLSH の問題点へと移したいと思います。

件名標目とは統制語であります。統制語といえども「ことば」、言語記号であることには変わりありません。そこで、私は、これまでの NDLSH の問題点を、言語学的な・記号論的な枠組みを参照して整理してみたいと考えます。

その枠組みとは、セマンティクス、シンタクス、そしてプラグマティクスというものです。セマンティクスとは、意味論、すなわち、ことばとその意味との関係に係るものです。シンタクスとは、統語論、すなわち、ことばとことばとのつながり方に係るものです。最後に、プラグマティクスとは、語用論、すなわち、ことばとそれをを使う者との関係にかかわるものです。この三つの枠組みのいずれにおいても、これまでの NDLSH は大きな問題を抱えていたといわざるを得ません。

### 2. 1 NDLSHの semantics (意味論)

まず、セマンティクス、すなわち、NDLSH の意味論的な側面です。現在の NDLSH の語彙数は、参照語を含めて、約 24,000 語です。一方、例えば LCSH は、2004 年に出た 27 版では 27 万語にのぼります。収録対象となる件名標目の範囲に違いがあるゆえ、単純比較はできないとはいうものの、そ

の数の差は歴然です。

語彙が少ないということは、つまり、意味論的に貧弱だということです。この語彙の少なさの最大の要因として、新しい主題へ対応する件名標目を新設することに、これまでかなり消極的であった、ということが挙げられます。例えば、Windows95 が出た 1995 年前後から、インターネットが瞬く間に世の中に広まり、インターネット解説書が続々と出版されました。にもかかわらず、NDLSH に「インターネット」という件名標目が登場したのは、2001 年でした。「データベース」という件名標目については、もっと強烈で、NDL は長年データベースの構築をしてきたにもかかわらず、「データベース」という用語が NDLSH に登場したのは、2002 年になってからです。

### NDLSHのsemantics

- ・「貧弱」
  - ←語彙の少なさ  
(標目自体の少なさ、参照語の少なさ)
- ・「あいまい」
  - ←「をも見よ参照」の欠如
  - ←スコープノートの少なさ
- ◆改訂：「豊富な」かつ「明確な」件名標目

また、統制語である以上、必須である「を見よ」参照（片参照）についても、その数が少なく、統制語としての体をなしていたとは言いがたい面があります。

貧弱さのみならず、意味の曖昧さも、NDLSH のこれまでの欠点として挙げられます。LCSH, BSH ほかの件名標目表では、件名標目間の関係性を示す「をも見よ」参照（相互参照）が記録されています。さらに、「をも見よ」参照を記録する際に、シソーラスで一般に使われる形式、BT (Broader Term : 上位語), NT (Narrower Term : 下位語), RT (Related Term : 関連語) が導入され、件名標目どうしの関係性がより詳しく示されています。NDLSH には、この「をも見よ」参照がありませんでした。また、「スコープノート」<sup>9)</sup> も、ごくわずかにしか見られませんでした。この「をも見よ」参照の欠如、「スコープノート」の少なさの結果、NDLSH の個々の標目の意味が曖昧なままでした。こうしたセマンティクスにおける貧弱さ、曖昧さは、利用者が検索するうえでも、さらには、カタログが件名付与作業を行ううえでも、NDLSH を非常に使いづらいものにしてきました。

## 2.2 NDLSHのsyntax (統語論)

次に、シンタクスについて、すなわち、件名標目の連結の仕方です。NDLSH は、件名標目付与の作業段階で主標目に細目をつなげて付与するという、事前結合方式を採ってはいます。しかしながら、これまで、その細目の結合の仕方、具体的には、地名細目や時代細目の結合の仕方、に制限が

多かった。それゆえ、件名標目が資料の内容を的確に表現しているとは言えませんでした。また、制限が多かったのみならず、その結合のルールにも曖昧な点がありました。

## NDLSHのsyntax

- ・ **制限が多い**  
(地理細目、時代細目の結合に制限)
- ・ **ルールがあいまい**
- ◆ **改訂：制限を緩和し、かつ統制のとれた結合**

今回の NDLSH 改訂は、まず、このセマンティクスおよびシンタクスにおける問題点を解消します。セマンティクスにおいては、新主題へ柔軟に対応して件名標目を新設することで、語彙を豊かにし、また、「をも見よ」参照「スコープノート」を記録することで、意味を明確にします。シンタクスにおいては、細目の結合の制限を従来よりも緩和し、かつ、統制のとれたものにします。こうした改訂の詳細については、先ほど申しましたように、この後の報告に譲ります。

### 2.3 NDLSHのpragmatics (語用論)

先に示しました三つの枠組みのうち、最後のプラグマティクスですが、極端に言えば、セマンティクスとシンタクスとを決めれば、件名標目表それ自体は完成します。しかしながら、プラグマティクスなくしては、件名標目表はただそこに存在しているだけで、目録作業のための、あるいは、検索のためのツールとはなりえません。さらにはまた、このプラグマティクスにおける問題点に、NDLSH が国内において標準的な件名標目表となってはこなかった、最大の要因があるとも考えられます。

さて、NDLSH のプラグマティクス、すなわち NDLSH とそれを使う者との関係における問題点としては、まず、「マニュアル」の欠如、ということが挙げられます。「マニュアル」というと語弊があるかもしれませんが、要は、NDLSH 自体を解説し、また、個々の件名標目付与作業の局面において指針となるような「ガイドライン」がない、ということです。

ご存知のとおり、LCSH には、その大きな標目表に匹敵するほど膨大な、ルーブリーフ 4 冊にわたるマニュアルがあり、刊行されています。そこには、一般的な件名付与作業から個々の主題分野にわたる作業のガイドラインが示されています。また、フランスの標準的な件名標目表 RAMEAU (Répertoire d'Autorité-Matière Encyclopédique et Alphabétique Unifié) においても、論理的に構築された明確な原則と作業のためのガイドラインが示されています。

もちろん、NDLSHにも、例えば平成3年（1991年）刊行の第5版には、表を説明するものとしての「序説」があります。しかし、この従来の序説のみでは、一貫性のある、かつ、客観性のある作業を行うにはやや不十分です。より実地的なガイドラインが不可欠です。それは件名付与作業に欠かせないものであるとともに、利用者に対して、どのような形での件名作業を行っているのかを示すためにも必要です。

## NDLSHのpragmatics

- ・「ガイドライン」「マニュアル」の欠如  
→件名作業における一貫性、客観性の不足

◆改訂：「序説」全面改訂、「マニュアル」公開

今回のNDLSH改訂においては、第5版にあった「序説」の書き換えも行っています。それは、以前の序説よりは、より詳細かつ具体的なものになるでしょう。また、ここ2、3年、件名標目作業のマニュアルが、担当係のもとで構築されてきています。将来には、この内部マニュアルを整備し、広く公開する予定です。

先にも述べましたとおり、プラグマティクスとは、語用論、すなわち、ことばとそれをを使う者との関係にかかわるものです。学術用語・専門用語を、その専門分野以外のことにまでむやみやたらと濫用し、粗雑な議論を行うことは慎まなければなりません。しかし、私は、それをあえて承知のうえで、このプラグマティクスというタームを比喩的に使っていることをお断りしておきます。つまり、プラグマティクス (pragmatics) というよりも、プラグマティック (pragmatic)、つまり、NDLSHについての実地的な側面、ないしは、実践的な側面、という意味合いをも込めています。

### 3. NDLSHの将来展望

先に、私どもNDL書誌部は、『全国書誌通信』誌上<sup>10)</sup>で、またホームページ上で、NDLSH改訂についてのお知らせをいたしました。その中で、「汎用性の確保」として、NDLSHが「日本の標準件名標目表」となること、また、NDLSHがメタデータにおいて広く使われること、この二つを目標として掲げました。すなわち、「汎用化・標準化」ということと「ネットワーク情報資源への適用」ということ、この二つを目標としているわけです。そこで、この2点について、従来の問題点と絡めつつ、NDLSHの将来展望を試みてみたいと思います。

### 3. 1 汎用化、標準化

まず、「汎用化・標準化」ということですが、その前に、NDLSHはNDL内での汎用性を確保しなければならないでしょう。冒頭で述べましたように、当初は、洋図書に適用されていたNDLSHですが、現時点では、和図書にしか適用されていません。洋図書、電子資料、逐次刊行物などその他の資料群には適用していません。また、和図書でも、実用書・娯楽書といった簡略整理資料や児童書には件名標目を付与していません。NDL内部での汎用化・標準化を置いては、国内での汎用化・標準化はあり得ないでしょう。これはNDL内での大きな課題であると認識しております。

それから、国内標準化についてです。NDLSHは、基本的にNDLの文献的根拠に基づいてきました。すなわち、NDLが収蔵した図書の目録に、件名標目として記入されるために作成されてきたものです。

<p><b>汎用化、標準化</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ <b>NDL内での汎用化</b> 適用資料群(ネットワーク系も含む)の拡大</li><li>・ <b>NDLSHの共同作成</b> 他館からのリクエストによる件名新設等</li></ul>
--

NDLSHが件名標目である以上、それは文献的根拠に基づくべきでしょう。しかしながら、その根拠が、必ずしも、NDLが収蔵した文献である必要はないという考え方もあり得ます。つまり、将来的には、NDLSHの共同作成の方向性を探ってみる必要があるでしょう。

平成15年度の書誌調整連絡会議<sup>11)</sup>のテーマは、「名称典拠のコントロール」ということで、いわば「国の典拠」を構築して、国内全体で著者標目をコントロールしていこう、というものでした。これの件名標目版を模索してもよいのではないかと。つまり、「汎用性の確保」を目標として掲げるのであれば、出来上がった件名標目表を提示して、単に使ってくださいというのではなく、他の図書館等からのリクエストを採り入れながら、件名標目表を維持管理していくことが必要ではないかと。周知のとおり、LCSHやフランスのRAMEAU、あるいはスウェーデンなど、参加館からのリクエストに基づき件名標目を新設するなど、図書館ネットワークの中で件名標目表を構築しています。

### 3. 2 ネットワーク情報資源への適用

次に「ネットワーク情報資源への適用」すなわち、メタデータへの適用です。NDLは、メタデータ記述要素<sup>12)</sup>として、ダブリンコア<sup>13)</sup>に準拠したものを公表しています。各国のいくつかの試みを見ると、メタデータにおける主題アクセスのツールとして、LCSHを準用している例が多い。一方、

NDLのメタデータ記述要素のうち、「主題」要素については、現在のところ、NDLSHを適用とはしていません。

実は、私は、このNDLのメタデータ基準の作成に携わったのですが、その検討時の平成12年(2000年)の段階では、当時のNDLSHでは、これを適用しても意味がない、と考えていました。その理由は、すでに述べた多くの欠点のゆえです。しかし、今回の改訂によって、NDLSHのこれまでの欠点

## ネットワーク情報資源への適用

- ・NDLメタデータへのNDLSH適用  
適用資料群(ネットワーク系も含む)の拡大
- ・日本語版FASTへ？

の多くは改善されるはずですが。ネットワーク情報資源について、NDLは、今後様々な展開を示していくはずですが、その資源への主題アクセスツールの一つとして、NDLSH適用を考える必要があるでしょう。

とはいうものの、ここに掲げた「汎用化・標準化」および「ネットワーク情報資源への適用」は、現時点では、あくまで目標であり、将来展望である、ということを強調しておかなければなりません。つまり、NDLとして、現時点で具体的な計画があるわけではない、ということをお断りしなければなりません。ただし、「ネットワーク情報資源への適用」ということについては、NDLにおける電子図書館計画の中で、現在検討を進めています。

## 4. おわりに

それでは、今回のNDLSH改訂は、これまでの問題点とこうした将来展望との間において、どのように位置付けられるのかを述べます。

例えば、周知のように、OCLCはLCと共同で、メタデータへの主題スキーマとして、LCSHをベースにし、かつLCSH本体と自動変換が可能なFAST<sup>6)</sup>を考案しました。このような仕組みが可能となるのも、LCSHという汎用化・標準化された確固としたベースがあるからです。先ほどの枠組みを使って簡単に言えば、FASTとは、LCSHの豊富なセマンティクスはそのままに、複雑なシンタクスを簡略化したものです。

翻ってみると、これまでのNDLSHは、セマンティクスは貧弱・曖昧であり、シンタクスは簡略化する以前に制限の多いものでした。そして、汎用化・標準化されてはいない。つまり、仮に日本版

FASTのような仕組みを作ろうにも、ベースとなるものがなかったわけです。

しかるに、今回のNDLSH改訂は、いわば、主題アクセスに係る、遅ればせながらの「インフラの整備」を行うことだと言えます。今後、様々な主題アクセスの仕組みを実現するためには、それを支えるツールを改善して、一つの土台を築かなければならない。逆に言えば、確固たる土台を構築し、それをベースに、またそれを活用して、様々な主題アクセスの試みへと向かう。つまり、多くの問題点を解消して、将来の展望を単なる展望ではなく現実のものとするための、基礎となるツールを構築する。そのためのNDLSH改訂なのです。

## おわりに

### NDLSH改訂

- ・従来の問題点(特にsemantics、syntax)解消
- ・将来へ向けての「インフラ整備」
- ・世界の動向とのリンク

こうした動きは、現在、各国・各言語圏で見られます。例えば、先月行われたIFLA大会の分類・索引分科会に提出されたペーパー<sup>14)</sup>は、ラテンアメリカの、スペイン語の、イタリアの、そしてスウェーデンの件名標目の動向に関するものでした。各国において、世界標準といわれるLCSHとの対応関係を考慮しながらも、それぞれ自国の言語による件名標目表の構築を進めています。そして、その構築は、それぞれの国が、今後の様々な主題アクセスの仕組みを展開していくための「インフラ整備」であるとも見受けられるのです。IFLA大会でのスウェーデンからの報告が、「我々は、我々自身のFASTプロジェクトをぜひとも必要とする」と結ばれていることから、それはわかります。今回のNDLSH改訂は、こうした世界の動きと、遅ればせながらリンクしているとも言えるのです。

## 報告

### 国立国会図書館件名標目表の改訂について

白石 郁子（国立国会図書館書誌部国内図書課主題係長）

#### 1. 国立国会図書館件名標目表（NDLSH）の現状

##### 国立国会図書館件名標目表 （NDLSH）の現状

- 平成3年(1991年) 第5版刊行
- その後は新設件名一覧でのみ広報  
平成14年(2002年)まで  
年1回 『全国書誌通信』上  
平成15年(2003年)以降  
2ヶ月に1回 国立国会図書館HP上  
(<http://www.ndl.go.jp/>)

改訂作業の実務に携わる立場から、改訂の具体的な内容について報告させていただきます。大柴の報告と少々重なりますが、まず『国立国会図書館件名標目表』(NDLSH)の現状について、簡単にご説明いたします。

NDLSHは、平成3年(1991年)の第5版まで冊子体で刊行してまいりました。その後の件名新設等のお知らせは、『新設件名標目一覧』のみで行ってまいりました。平成14年(2002年)までは、年1回、『全国書誌通信』誌上で、平成15年(2003年)以降は、2ヶ月に1回、国立国会図書館ホームページ上で、pdfファイルでお知らせしています。

#### 2. NDLSH改訂の動き

このように、いわば長い眠りについていた感のあるNDLSHですが、2004年から本格的に始まった改訂作業により、現在変動の真っ只中にあります。2003年秋、NDLSH改訂に向けて検討班が発足し、改訂方針の検討を開始いたしました。その後細部を詰め、2004年1月より、国内図書課主題係を中心に具体的な改訂作業にうつり、現在も進行中です。

そして10月、暫定版<sup>15)</sup>という形ではありますが、13年ぶりに改訂版の公開を予定しており、当館ホームページ上で、pdfファイルによる公開となります。

こちらが、暫定版入り口の画面です(p.29参照)。上が、NDC新訂9版の代表分類順に排列した表、下がよみの50音順に排列した表です。

『2. 歴史』 をクリック

▶ NDC新訂9版分類記号順 排列表 ▶ 凡例はこちら (Adobe Acrobat PDF Format 77.5KB)

0.総記	1.哲学	2.歴史	3.社会科学	4.自然科学
5.技術	6.産業	7.芸術	8.言語	9.文学

※見出し数 7,093件(重出含む) / 標目数 5,552件  
 ※この排列表には、NDC新訂9版の整備が完了している件名標目のみを収録していません。



▶ 五十音順 排列表 ▶ 凡例はこちら (Adobe Acrobat PDF Format 202KB)

ア	イ	ウ	エ
カ	キ	ク	ケ
サ	シ	ス	セ
タ	チ	ツ	テ
ナ	ニ	ヌ	ネ
ハ	ヒ	フ	ヘ
マ	ミ	ム	メ
ヤ	ユ	ユ	
ラ	リ	ル	レ
ワ			数字

※見出し数 23,928件 / 標目数 16,472件  
 ※よみがな濁音・半濁音から始まる件名標目は、表の清音部分をご  
 例: 件名標目「バーコード」は、五十音順排列表の「バ」の中にあ  
 ※「チ・ツ」は「ジ・ズ」にカナ表記を統一しています。

18 仏教

19 キリスト教

2. 歴史(20~29一括) (Adobe Acrobat PDF Format 202KB)

20	歴史
21	日本史
22	アジア史・東洋史
23	ヨーロッパ史・西洋史
24	アメリカ史
25	北アメリカ史
26	南アメリカ史
27	オセアニア史・南極地方史
28	伝記
29	地理・地誌・紀行

3. 社会科学(30~39一括) (Adobe Acrobat PDF Format 241KB)

30	社会科学
31	政治
32	法律
33	経済
34	財政
35	統計
36	社会
37	教育
38	風俗習慣・民俗学・民族学
39	国誌・東洋

『23 ヨーロッパ史・西洋史』 をクリック

『ツ』 をクリック



国立国会図書館件名標目表2004年度版(暫定版)

ツアモツゴ	ツアモツ語 NDLC: KL181
ツイカンエンパン	椎間円板 NDLC: SC351
ツイセキカノウセイ	追跡可能性 → トレーサビリティー[トレーサビリティー]
ツイチョウ	追徴 NDLC: A314 ; A761
ツウウン	通運 → 運送(ウンソウ)
ツウカ	通貨 → 貨幣(カヘイ)
ツウカギゾウ	通貨偽造 → 貨幣一偽造[カヘイギゾウ]
ツウカキョウテイ	通貨協定 UF: 支払協定 NDLC: DE173
ツウカギレイ	通過儀礼(地理区分) NDLC: G187 ; GD24
ツウカケン(コクサイホウ)	通過権(国際法)

国立国会図書館件名標目表2004年度版(暫定版) NDC順排列表 【第2次区分表:23 ヨーロッパ史・西洋史】

230	キリスト教文化 [キリストキョウブンカ] NDC(9): 190 ; 230 NDLC: GG61 ; HP11
230	西洋文明 [セイヨウブンメイ] NDC(9): 230 NDLC: GG61
230	日本と西洋 [ニホントセイヨウ] UF: 西洋文明と日本 UF: 日本一文化一西洋の影響 UF: Japan -- Civilization -- Western influences RT: 東洋と西洋 NDC(9): 210 ; 230 NDLC: GB73
230	東洋と西洋 [トウヨウトセイヨウ] UF: 西洋と東洋 UF: East and West

例えば、「ツ」のところをクリックしていただきますと、このように「ツ」で始まる件名標目の一覧がご覧いただけます。

次に NDC 順の方を見ていただきますよう。

NDC 順の排列表は、まず入り口で第 1 次区分表に従って 10 分割しています。例えば、2 類、歴史のところをクリックしていただきますと、さらに、第 2 次区分表にしたがって 10 分割、つまり全体で 100 分割しています。歴史分野全体を一括してご覧いただくこともできますし、例えばヨーロッパ史のところだけをご覧になりたい場合は、「23 ヨーロッパ史. 西洋史」をクリックしていただく、該当する件名標目の一覧がご覧になれます。

### 3. 改訂の概要

#### 改訂の概要

- NDLSHのシソーラス化
- 語彙の増大
- 汎用性の確保
- ルールの明示

この改訂作業を開始するにあたり、私どもは四つの大きな改訂方針を掲げました。「NDLSH のシソーラス化」、「語彙の増大」、「汎用性の確保」、そして「ルールの明示」です。では、具体的な改訂内容へと話を進めたいと思います。

#### 3. 1 NDLSHのシソーラス化

改訂方針の一つ目は「NDLSH のシソーラス化」です。従来行っていなかった「をも見よ」参照を導入いたしました。これによって、関係性の深い件名標目を結びつけることができ、よりの確な検索が可能になります。また、件名標目同士の階層構造を表すことによって、個々の件名標目の意味もより明確になります。形式はシソーラスで使われているものを導入し、それぞれ上位語は「BT (Broader Term)」、下位語は「NT (Narrower Term)」、関連語は「RT (Related Term)」で表しています。例えば、この「マス・コミュニケーション」の例では、上位概念である「コミュニケーション」、下位概念である「マス・コミュニケーションと社会」、直接的な上下関係はないものの関連性の深い概念である「マス・メディア」という件名標目が存在することを示しています。

NDLSHのシソーラス化

## 「をも見よ」参照の導入

- シソーラスで使われている形式を導入

マス・コミュニケーション<地理区分>

BT:コミュニケーション

NT:マス・コミュニケーションと社会

RT:マス・メディア

### 3. 2 語彙の増大

改訂方針の二つ目は「語彙の増大」です。そのための具体的な取り組みが三つ挙げられます。積極的な件名新設，参照語の充実，細目の見直しです。

#### 3. 2. 1 積極的な件名新設

まず，件名新設の基準の見直しを行い，新しい主題へ積極的に対応するよう方針転換しました。従来 NDLSH は新しい主題への対応に消極的で，既存の件名標目で代用する傾向にありました。そのため，的確な検索は難しくなりますし，書誌レコードの実績が膨れ上がってしまうことで，新設そのものが難しくなるという悪循環も見受けられました。例えば，3年前のニューヨークのテロについても，以前ならば「テロリズム」でずっと代用しつづけたかもしれませんが，現在は「アメリカ同時多発テロ(2001)」という特定の件名標目を付与しています。

語彙の増大①

### 積極的な件名新設

- 新主題への積極的な対応

例) タイトル: ニューヨークセプテンバー11

以前は...

テロリズム

現在は...

アメリカ同時多発テロ(2001)

新設基準を見直してから，件名標目の新設数は飛躍的に増加しています。平成16年(2004年)の1月から6月までに新設した件名標目は158件です。平成15年(2003年)1年間での新設件数

が 145 件、平成 14 年（2002 年）4 月から 12 月の 9 ヶ月間でわずか 20 件であったことと比べると、驚異的な伸びであることがおわかりいただけるかと思えます。

### 3. 2. 2 参照語の充実

語彙の増大②

#### 参照語の充実

- 「を見よ」参照の積極的な記録
- 人口に膾炙した略語の採用

例) サクソフオーン  
UF : サックス

また、参照語の充実にも意識して取り組んでおります。いろいろな言い回しを参照語としてとりあげることによって、思いついた言葉から件名標目にたどり着くのが容易になり、結果的に検索のハードルは低くなります。そこで、「を見よ」参照を積極的に記録するだけにとどまらず、従来は参照語として採用してこなかった略語についても、人口に膾炙したものは積極的に採用することとしました。例えば、件名標目「サクソフオーン」には、略語である「サックス」を「を見よ」参照として記録しています。

### 3. 2. 3 細目の見直し

語彙の増大③

#### 細目の見直し

- 地理区分、時代区分の制限緩和

例) タイトル:江戸時代の印刷文化  
-家康は活字人間だった!!

以前は...

印刷 -- 歴史

現在は...

印刷 -- 日本 -- 歴史 -- 江戸時代

それから、このたび細目の全面的な見直しを行いました。従来は地理区分、時代区分に多くの制

限を設けていました。例えば、「日本」で地理区分をする件名標目はわずか47件でしたし、政令指定都市以外の市町村名による地理区分もしていませんでした。また、時代区分についても、時代細目付きで件名標目表に収録している一部の件名標目に限定していました。

より柔軟に細目を活用し、的確に主題を表現できるようにするために、細目の見直しを行い、制限を緩和しました。一部を除き全ての件名標目を「日本」で地理区分可とし、政令指定都市以外の市町村名による地理区分も解禁しました。また、時代区分可能な件名標目の制限も撤廃しました。

例をご覧ください (p. 32参照)。タイトルから、日本の江戸時代における印刷の話であることが伺えます。地域、時代とも特定できるにもかかわらず、従来は「印刷—歴史」という件名標目を付与するのが限界でした。ですが、制限の緩和により、「印刷—日本—歴史—江戸時代」という主題を的確に表現できる件名標目を付与することが可能になりました。

細目については、種類ごとに整理した一覧を、件名標目表と同時に公開する予定です。

### 3. 3 汎用性の確保

改訂方針の三つ目は、「汎用性の確保」です。NDLSHが日本における標準件名標目表となることを、目標として掲げています。そのための具体的な取り組みとして、より適切な用語の採用、『基本件名標目表』(BSH)との調整、『米国議会図書館件名標目表』(LCSH)の入力の三つが挙げられます。

#### 3. 3. 1 より適切な用語の採用

汎用性の確保①

#### より適切な用語の採用

- 件名標目として、より適切な用語を採用

例) 架空索道 → ロープウェー

例えば、件名標目「架空索道」を「ロープウェー」に訂正するなど、ここ数年、標目に採用する言葉の見直しを行ってきました。従来は、明確な基準はなかったものの、結果として学術用語を優先する傾向にありました。学術用語の採用そのものを否定するわけではありませんが、学術用語にこだわるあまりに一般にはわかりにくい、馴染みのない用語を標目として採用することも多かったのではないのでしょうか。学術用語を採用するのがよいか、日常語を採用するのがよいかは、分野により、その言葉の認知度により異なると思いますが、辞書類での扱いを参考に、より適切と思われる

る言葉を採用するように努めています。

### 3. 3. 2 BSH第4版との調整

汎用性の確保②

#### BSH4との調整

- 改訂作業の際参考とする

例) 歯科補綴学  
(根拠:基本件名標目表 第4版)

次に、BSH 第4版との調整を考慮いたしました。ご存知の通り、BSHは国内の公共図書館、大学図書館で広く使われており、BSHとの調整を図るということは、NDLだけではなく、多くの図書館にとっても有益であると考えております。標目訂正や参照追加を行う際、BSHでの扱いを参考に、標目の形式をあわせる、もしくは参照形として記録するといった形での調整を心がけております。その一例が、ここに挙げた「歯科補綴学」という件名標目です。これは、標目訂正の際、BSHで使われている形式を採用したものです。

### 3. 3. 3 LCSH入力

汎用性の確保③

#### LCSH入力

- 個々の件名標目に対応するLCSHを参照語として入力

例) コーポレートガバナンス  
UF:Corporate governance

そして、事実上の世界標準と言えるLCSHを参照語として記録する試みを始めました。「をも見よ」参照と代表分類の整備が終わった件名標目から順に、対応するLCSHの入力を行っています。

**3. 4 ルールの明示** 改訂方針の4番目は「ルールの明示」です。そのための取り組みとして、スコープノート<sup>9)</sup>の充実、序説の改訂が挙げられます。

#### 3. 4. 1 スコープノートの充実

ルールの明示①

### スコープノートの充実

- 類似件名標目との使い分けを明記

例) 蔵書目録

SN:図書館等の所蔵する資料の目録に限定して使用.

SN:図書館等の所蔵資料に限定されない文献目録, 図書のリストには「書目」を使用.

従来、NDLSH においてはスコープノートをあまり活用してきませんでした。その件名標目のカバーする範囲はどこまでなのか、類似した件名標目とはどのように使い分けるのか、といった情報が曖昧だったため、件名付与作業の現場でも、混乱がしばしば起こっていました。そこで、使い分けが曖昧な件名標目の見直しを行い、スコープノートへの使い分けの明記、ないし統合・削除といった措置をとりました。今後も、積極的にスコープノートを活用していくつもりでおります。

#### 3. 4. 2 「序説」全面改訂

ルールの明示②

### 「序説」全面改訂

- 従来より詳細かつ具体的
- 表の説明のみならず、件名作業指針も追加

そして、より詳細で具体的なものを目指し、序説を全面改訂いたしました。新しい序説には、NDLSH において今までなかった件名作業における指針が含まれています。後で触れますが、将来的には内

部で使用しているマニュアルの公開も予定しております。

#### 4. NDL-OPACへの反映

##### NDL-OPACへの反映

- 簡単に類似件名の実績を検索できる
- 利用者が思いついた言葉で検索できる
- 英語から検索できる

～簡単に検索できるように～

では、ご説明した改訂作業が、NDL-OPACでの検索にどのように反映されているかをご覧くださいと思います。

まず、「をも見よ」参照導入による効果についてです。例えば、「マス・コミュニケーション」の例を見てみましょう (p. 37参照)。「マス・コミュニケーション」で検索すると、一緒に関連性の深い件名標目も表示されます。残念ながら、NDL-OPACの仕様上、関係性を表す導入句、「BT」「NT」「RT」は表示されないのですが、例えばマスコミの社会に与える影響についての本を探している場合でしたら、より特定の「マス・コミュニケーションと社会」という件名標目があるのがわかりただけだと思います。そして、クリックしていただくだけで「マス・コミュニケーションと社会」の実績を簡単に検索できます。これも、「をも見よ」参照による効果です。

では次に、「サククス」の例を見てみましょう (p. 38 参照)。NDL-OPACは参照語からの検索も可能です。「サククス」と入れることにより、件名標目「サクソフーン」の実績が検索できます。このように、書誌レコード上のどこにも「サククス」という言葉が存在しない実績も、検索できます。

また、参照語から検索できるということは、LCSHからも書誌を検索できるということです。例えば、英語で「corporate governance」と入れていただきますと、「コーポレートガバナンス」というNDLSHの実績が検索できます (p. 39 参照)。洋図書の書誌レコードには、コピーカタログングに使った書誌レコードに付与されていたLCSHが残されていますので、洋図書のチェックボックスも選択しておけば、和図書、洋図書の横断検索も可能です。





国立国会図書館 NDL-OPAC(雑誌一般検索) - Netscape

『corporate governance』を  
検索

詳細設定 所属種別 全部 入力消去 検索

タイトル  AND 説明

著者・編者  AND 説明

出版者  AND 説明

出版年  年以降 年まで 説明

件名  AND 説明

分類記号  AND 説明

ISBN/ISSN  説明

書誌番号  説明

請求記号  説明

詳細設定 入力消去 検索

項目間を AND乗付で結合

国立国会図書館 NDL-OPAC(雑誌詳細表示) - Netscape

書誌詳細表示

所蔵詳細/申込み 一覧に戻る 絞り込み/再検索 最初から検索

書誌情報 全項目を表示 前の1件 次の1件

請求記号 D437-063

タイトル OECDのコーポレートガバナンス原則

責任表示 OECD閣僚理事会,OECD民間諮問委員会編

責任表示 奥島孝康監修

責任表示 酒井富太(ほか)訳

出版地 東京

出版者 金融経済事情研究会

出版年 2001.7

出版地 (東京)

出版者 きんぷい(砲志)

形態 17p : 21cm

注記 原タイトル: OECD principles of corporate governance.

ISBN 4-322-10309-4

入手条件・定価 1800円

全国書誌番号 20193002

個人著者標目 奥島, 孝康 (1939-) || オクシマ,タカヤス

個人著者標目 酒井, 富太 || サカイ,ライタ

団体・会議名標目 金融経済事情研究会 || キョウキョウキョク カイワシ キョウ

著者件名 コーポレートガバナンス

→ 東京 || トウキョウ

→ 委員会等設置法 || イインカイトウセツチガイシヤ

NDLC U457

NDC(O) 355.4

本文の言語コード jpn 日本語

書誌ID 00003007468

『コーポレートガバナンス』の  
NDLSHの実績を検索できる

国立国会図書館 NDL-OPAC(雑誌詳細表示) - Netscape

書誌詳細表示

所蔵詳細/申込み 一覧に戻る 絞り込み/再検索 最初から検索

書誌情報 全項目を表示 前の1件 次の1件

請求記号 DF273-B2

タイトル Analyzing and managing banking risk : a framework for assessing corporate governance and financial risk / Hennie van Greuning, Sonja Brajovic Bratanovic.

版表示 2nd ed.

出版地 Washington, D.C.

出版者 World Bank

出版年 2003

形態 xvi, 367 p. : ill. ; 23 cm.

注記 Originally published under title: Analyzing bank risk.

ISBN 0821364163

RLIN番号 DCLC20030545004-B

USMARC番号 2003045004

個人著者標目 \* Greuning, Hennie van.

→ Van Greuning, Hennie

個人著者標目 Greuning, Hennie van., Analyzing banking risk.

個人著者標目 Brajovic, Bratanovic, Sonja, 1946-

→ Bratanovic, Sonja Brajovic, 1946-

著者件名 Bank management.

著者件名 Risk management.

著者件名 Corporate governance.

NDLC U322

LOC HC1615

DDC 332.1/068/.1

本文の言語コード eng 英語

書誌ID 000004124889

洋図書の検索も可能

## 5．暫定版公開後の予定

今後の予定についてお話いたします。まず、暫定版について広くご意見を伺うべく、ホームページ上から意見を寄せていただく仕組みをつくります。期間は2004年末までとし、いただいたご意見は可能な限り今後の改訂に反映させる予定です。

また、今後は本表の更新を年に1回行う予定です。その間の動きにつきましては、『新設件名標目一覧』によりお知らせいたします。

さらに、現在国内図書課主題係で維持している件名作業に関するマニュアルにつきましても、整備の上公開する予定です。

最後に、現在も改訂作業は進行中であり、担当者一同努力しております。ですが、皆様からご覧になれば、まだまだ至らないところが多いかと思われます。NDLSHをよりよいものにしていくために、皆様のご意見、ご協力を賜りますようお願いし、報告を終了させていただきます。

## 報告

### 基本件名標目表のこれから

柴田 正美（日本図書館協会件名標目委員長）

#### 1. 件名標目が見直されている

ご存知のように、『出版年鑑』では2002年から件名の付与が行われており、すでに3年分が蓄積されています。3年分全て見てきたんですが、約4分の3に件名が付けられていますので、年間約5万件の蓄積になります。『出版年鑑』は、現在『日本書籍総目録』<sup>16)</sup>と合体しています。同時に売ることになっていますし、『日本書籍総目録』はCD-ROMで配布されるわけです。そして、この『出版年鑑』の蓄積が『日本書籍総目録』に多分反映されています。現在『日本書籍総目録』が図書館で使われている状況からすると、データに対する依頼心というか、そういうものが非常に大きいですから、『出版年鑑』の件名標目が、今後次第に広がっていくんじゃないかと考えています。

『出版年鑑』2002年版について調べたことをもう少しお話しさせていただきます。2002年版で700(芸術分野)までチェックしたところ、9,368件の件名が使われていました。これに語学・文学分野を含めると、1万件くらいの件名が1年間の『出版年鑑』で使われており、そのうち約1,000件は新たに作られているのではないかと思います。ただ、BSH(基本件名標目表)と比べた場合、BSHでは別の件名があるけれども、それを使わないで新たに作っているものが約450件ありました。今後BSHとの調整を考えなければいけないという気がしますし、事前結合型でないのが結構ありましたので、そういう問題も含んでいると思いました。

『出版年鑑』はNDCの付け方が、ポイント以下2桁、つまり5桁です。したがって、BSHと違うものも当然出てくるということで、必ずしも『出版年鑑』がBSHと同じ形にならないだろう。そして、それが『日本書籍総目録』に影響してくるとしたら、現場の図書館は混乱してしまうんじゃないかということを恐れています。

それから『出版年鑑』は、件名標目表は何によるのかということが明らかにされていません。その結果、おかしい状態が起こってるんですね。例えば、BSHでは「電子計算機」はBSH第3版までであり、BSH第4版で「コンピュータ」を新設しましたが、『出版年鑑』では、BSH第4版とBSH第3版の件名が混在しているという状況が見られます。これは、多分NDLSH第5版とBSH第3版でやっていて、存在しない場合に作ることにした結果、統一の取れてない件名標目になったのではないかと推測しています。

それから資料にあります全国学校図書館協議会(全国SLA)<sup>17)</sup>ですが、今年から、新たに件名を自分たちの『学校図書館 速報版』に付けるということを始めています。そしてここに掲載している選定図書リストを、学校図書館ではよく資料の選定に使っています。件名が付けられ、中身を見る

よくなると、それに基づいた行動が始まるんじゃないかということも考えられます。

『出版年鑑』あるいは全国 SLA の動きに見られるように、全般的に件名に対する依頼心が非常に強くなってきています。これは先ほどの上田先生のお話にもありましたが、検索を件名でという動きが一般的になりつつあるのだらうと思います。

全国学校図書館協議会の選定図書リストにはいろいろ問題があります。背景となる『中学・高校件名標目表』<sup>18)</sup>は 1999 年発行の第 3 版を使用しています。『小学校件名標目表』<sup>19)</sup>は第 2 版を使用しています。第 2 版はもうまもなく刊行できると聞いていますが、表のないまま件名標目を個々の本に付けるということが行われておりますので、うまく使えるのかどうか問題であると私は認識しています。

次の問題は件名標目表の中身についてです。小学校件名では「江戸時代」という件名があるんですが、中学・高校件名では「日本史 江戸時代」になるというように、同じ学校図書館と言いつつも扱いに違いがあります。それを児童・生徒にどのように教えていくかが、今後の課題になるだらうと思います。学校図書館では、総合学習が始まってから探索活動が非常に増えています。その探索対象に対して件名が付けられていると思うんですが、小学校の時代と中学・高校では件名の付け方が違うのは、やや問題ではないかと思っています。

それから、小学校件名では、例えば「クローン」あるいは「エコロジー」という件名が突然出てきます。はたしてこれが定着した言葉になるのかどうか、非常に気にかかっております。それから、「バイオテクノロジー」も件名に取り入れられていますが、BSH では「バイオテクノロジー」は採用しないで「生物工学を見よ」としております。いわゆる生涯学習的な視点からすると、このような相違は、児童・生徒あるいは児童・生徒を終えた人たちに相当な努力を押しつけることになるのではないかと思います。こうした利用の流れみたいなものも、件名標目を考えるときには大事ではないかと思っています。

## 2. ネットワークとコンピュータを利用する図書館界での問題

ネットワークとコンピュータを利用する図書館界での問題については、まず「件名」と「タイトル中のコトバ」を図書館界の人たちですら、あまり明確に分けていないということがあります。この背景を考えてみたんですが、「件名」という言葉があまりにもいい加減に使われているからでないかと私は見えています。それから、実現するシステム側の問題、コンピュータ・システムを作る側の問題もあると思います。何となく「コトバが件名だ」という感覚にさせて、「タイトル中のコトバも件名だよ」とシステムが思い込ませているのではないかという気がしています。この辺は今後図書館がシステム設計を行う際の課題であると考えています。

次に、「関連するコトバを思いつかない利用者」を挙げました。これは上田先生もおっしゃっていましたが、利用者自身がいろんなことに引きずられてしまってるんじゃないか。そして、それをサ

ポートするシステムが、今のところできていない気がします。わずかに見いだしたもので、『シソーラス活用辞典』<sup>20)</sup>というCD-ROMがありますが、これを私はBSHの新設件名を考えるときに日常的に使いながら、かつ、こういうことを利用者に教えていく場が必要ではないかと思っていました。この『シソーラス活用辞典』が、どの程度世の中に流布しているのか私は知りませんが、図書館員でもあまり使わない辞典ではないかと思います。これをうまく使いこなす、あるいはシステムの中に組み込むということを、今後検討していく必要があるだろうと考えています。

### 3. BSHのこれから

そろそろBSHの今後ということになるんですが、まずは資料に委員会の見解(p.45参照)を出しておきました。BSH第4版の標目追加1回目として、400件くらいの追加標目候補を数年分まとめて公表しました。これに対して今ご意見を求めているところですが、一向に意見が出てきません。私の気持ちとしましては、意見を聞いたうえで手直しをし、次の段階としての第2次では2000年を対象に150件追加を考えております。第2次の準備ができたところで、先の400件については確定し、年単位で少しずつ増やし、最終的にはBSHの最新版として公表したいと思っています。

今後の追加標目候補選定作業についてですが、『出版年鑑』、『出版ニュース』<sup>21)</sup>の件名標目のチェック、点検も考えていかなきゃいけないだろうと思っております。このことは委員会の中でも論議をし、この方向で進めていくことになってはいますが、何しろ委員会はボランティアですので人手が足りません。1年間に150件チェックするといっても、皆さん仕事を持ちながらやっていますから、大変なんですね。次のリストアップ作業に進めないこともあり、結果として第1次追加標目を報告したままの状況となっています。

そうした新設件名を作るという作業とあわせて、先ほど指摘しました、システムの問題や、学校件名の問題についても件名委員会として検討しております。参考資料に「北・村木論文」<sup>22)</sup>を掲げました。ここでは中学・高校件名標目表とBSHとがどのように連携するかということを述べています。北さんは件名標目委員会のメンバーです。委員会の課題は、この論文に書かれていることをわれわれが積極的に考えていかなきゃいけないということと、追加件名について各図書館で使えるようにするにはどうすればいいのかということです。この400件を公表する前の段階で、件名標目委員会ではソフトウェアメーカーの人に声をかけ、委員会が作った新しい件名と、既存の書誌データの件名とを突き合わせるシステムを提案したことがあるんですが、メーカー側は直ちに乗ってくる状況ではありませんでした。

新設件名を過去のデータに遡って反映させるには、各図書館が持っているソフトウェアまたはプログラムを、反映できるような形に変えなければいけないと考えています。そして追加件名作業と合わせて、そのしくみを図書館システムに組み込ませることが、今後非常に大事な課題になると思います。日本図書館協会が言えば、図書館向けシステムの中に取り込んでもらえるのではないかと考えている次第です。

今後のBSHにとって一番の問題は、追加件名を確実に示していくことです。今回、国立国会図書館が新しい件名標目表を公開し、かつ今後追加していくという話になりますと、ある面では重複します。その重複をどういう形で吸収、または一本化していくのかを、日本図書館協会と国立国会図書館との間で論議をしていかなばならないと感じている次第です。

## < 参考資料 >

### 『基本件名標目表第4版』標目追加(案)第1次について

#### はじめに

1983年に刊行された『基本件名標目表第3版』を改訂した「第4版」(以下「BSH4」とする。)は、1997年段階までに出版された資料等を対象として標目の選定を行った。委員会ではBSH4刊行後は、そのCD-ROM版作成に力を傾倒することとし、標目追加作業は緩やかに進めることにしていた。CD-ROM版は、予測以上に時間がかかってしまったが、2002年12月やっとのことで世に問うことができた。

この間に進めてきた1998年以降に出版された資料等を対象とする「追加標目候補」について、(案)を逐次公表し、関係各位の意見を聞きながら相当の程度がまとまったところでBSH4の改訂版を作成する心積もりである。提示する(案)の中には委員会内の「異見」も表示してある。関係各位の率直なご意見を委員会にお伝えいただくことをお願いする。

#### 「追加標目候補」選定方針

BSH4の「標目選定方針」を踏襲する。

選定の素材となる資料等は『選定図書総目録』に収録されたものとした。

CD-ROM版刊行の事実を踏まえて、次のような点について改めて強調しておきたい。

実際に刊行されている図書(単行資料および物理単位の資料)を主な対象とする。その結果、概念としては必要と思われるものでも追加されていないことになる。

個々の図書館において主標目と細目をそれぞれ独立して付与し、それらを事後に結合して特定の概念を表示できる事後結合方式の導入可能性を考慮した。(案)に提示したものでは「主標目・細目」を「一つの標目」として認識してほしい。

作業にあたっては『国立国会図書館件名標目表第5版』(NDLSH)を参考とし、形の統一を図るようにしたが、採用しなかったものについては「参照語」として掲げるようにした。

BSH4で新たに作成した『階層構造標目表』の構造を維持する。

#### 今後の追加標目候補選定作業について

日本図書館協会のサイトにある本委員会のページで公表するとともに、意見を本委員会宛の電子メールによって求める。

それらをもとに委員会で検討を加え、逐次、追加標目を確定し、それらも本委員会のページで公表する。そのフォーマットはCD-ROM版と整合性を持たせる。

今回の追加標目候補(案)は、第1次であり400件足らずである。これらは1998年～1999年刊行の資料が対象なので、第2次では2000年を対象に150件程度、さらに第3次では2001年刊行分を対象として同じく150件程度を予定している。

このほかに『出版年鑑2002年版』および2002年3月下旬号以降の『出版ニュース』掲載の「件名標目」について検討を加え、追加標目候補に採録を検討する。

## 追加標目候補(案)第1次

番号 典拠資料の刊行年次下2桁 + 『選定図書総目録』掲載ページ + 一連番号

件名標目 件名標目候補、参照標目候補( で件名標目候補を指示)

NDC8 NDC8版による分類記号、2つ以上あるときは「 ; 」で区切る

NDC9 NDC9版による分類記号、2つ以上あるときは「 ; 」で区切る

「 + 」をつけたものはNDC9版において新設された分類記号である

TopTerm BSH4の『階層構造標目表』での最上位標目

BroaderTerm より上位の件名標目。BSH4に収録されたものが多い

NarrowerTerm より下位の件名標目。BSH4に収録されたものが多い

Note 注 委員会が検討するにあたって付けた注で、標目付与にあたっての留意点 ともなる

SeeAlso 「をも見よ」参照

典拠資料 標目候補とする典拠となった資料を示す

NDLSH 『国立国会図書館件名標目表第5版』で対応するもの

検討結果 委員会としての結論( : 採用、 : BSH4の修正) 委員会内の異見 も記録した

項目の間は「 \ 」で区切った。 \ が続く場合は、対応する項目が空白の場合である

番号 \ 件名標目 \ NDC8 \ NDC9 \ TopTerm \ BroaderTerm \ NarrowerTerm \ Note 注 \ SeeAlso \ 典拠資料 \ NDLSH \ 検討結果

## 報告

# Facets on the WEB 検索 GUI における統制語彙の新たな役割と 国立情報学研究所メタデータ語彙集におけるマルチファセット統制語彙の試み

神門 典子(国立情報学研究所教授)

今日は「Facets on the WEB」ということで、ネットワーク環境下で、統制語彙がどのような役割を担う可能性があるかについてお話をさせていただきます。あわせて、国立情報学研究所のメタデータ・データベース共同構築事業において使用しているメタデータ語彙集をご紹介します、最後に国立国会図書館件名標目表への期待についてお話ししたいと思います。

## 1. 統制語彙の役割の変化

### 統制語彙の役割の変化

- 統制語彙（件名標目表、分類表、シソーラスなど）
- 伝統的役割：索引づけと検索における語彙統制
  - 自然言語：多義性、同義性
  - DBの索引と検索式で、同じ概念を統制語彙中の同じラベルで表現することにより、効率よく検索
- 新たな役割：検索の支援
  - ナビゲーション

#### 1.1 統制語彙の伝統的役割

統制語彙とは、件名標目表、分類表、シソーラスのことであり、索引づけと検索における語彙の統制という役割があります。文献の中で使われている言葉、あるいは利用者が検索質問として使う自然言語は、多義性や同義性があり同じ件名がいろいろな言葉で表されます。そういった言葉の使い方の揺れをコントロールして、正確で一貫性のある索引づけを行い、効率よく検索できるようにするのが、伝統的な統制語彙の役割です。

## 1.2 統制語彙の新たな役割

一方、先ほど上田先生から「サーチエンジンに慣れた利用者」(p.16参照)というお話がありました。ネットワーク環境での検索に慣れた利用者が、統制語彙に対して何を求めてくるのかということがあります。検索エンジンには、Googleのように何か言葉を入れて検索するタイプと、Yahoo!のようにディレクトリをたどるタイプがあります。Googleがいいかと思うと、意外とYahoo!は根強い人気があるんですね。それは、探し方がわからないときに、検索語を入れなくても関心のあるものに導いてくれる枠組みを、便利と感じる人が結構いるということです。今改めて、ネットワーク環境のナビゲーションを支援する枠組みとしての統制語彙の役割に対する期待が膨らんでいます。

## 1.3 統制語彙の問題点と検索技術をめぐる変化

### 統制語彙の問題点と検索技術をめぐる変化

- ・アクセスビリティ：  
統制語彙は利用者には難しい、めんどう
- ・維持
- ・検索技術の発展：  
自然言語検索、自動索引、適合度順出力
- ・利用者の多様性：だれでも使える
- ・対話型GUI
- ・ネットワーク情報資源、不均質な情報資源

統制語彙の問題点は、一つにはアクセスビリティ、利用者にとって難しいという点です。先ほど大柴さんのご報告で「semantics (意味論)」「syntax (統語論)」「pragmatics (語用論)」とありましたが、鋭い分析だと思いました。利用者側から考えると、「semantics」は語彙の規模が十分にあればカバーできる。しかし、細目のような「syntax」が利用者にとってアクセシブルかということ、必ずしもそうは言えない。さらに「pragmatics」は、件名が付与されている理念が利用者にわからないと、本当の意味で有効な使われ方がされないということです。昔は図書館員なり専門のサーチャーが、統制語彙の体系やインデキシングのルールを理解したうえで検索していたので、「syntax」「pragmatics」が十分理解されていたと言えます。しかし、今は図書館のオンライン目録を子どもからお年寄りまで多くの利用者が使う時代です。

次の問題は、統制語彙の維持です。言葉はメンテナンスされないと死んでしまいます。NDL(国立国会図書館)が、NDLSH(国立国会図書館件名標目表)を今後毎年更新されることは大変喜ばしいと

思います。それから、上田先生が「literary warrant」(文献的根拠)(p.15参照)とおっしゃっていましたが、統制語彙はその概念について書かれているリソースが一定量以上あり、実際に使われている必要があります。維持にとって、それが一番の問題です。

さらに、先ほど申しあげた検索技術の発展です。自動索引、自動検索の技術は進歩しているので、統制語彙がないと検索できないわけではありません。図書館の目録はレコードが短いので、検索結果のランキングの面ではチャレンジングではありますが、技術的に可能です。また、統制語彙を維持し、付与するコストとの関連があります。

次に利用者の多様性です。専門家だけでなく小学生などの子どもも使います。

さらに、情報のタイプが重要になります。ネットワーク環境ではあらゆるものを同時に探すため、不均質な情報を区別する仕組みが必要だと思います。伝統的に、図書館では普通の図書、児童書などに目録が分かれていましたが、ネットワーク情報資源では多様な種類の情報が混在しているので、資料のタイプについての情報が重要です。

#### 1.4 統制語彙の今日的役割

##### 統制語彙の今日的役割

- 自然言語検索は簡単
- しかし、情報検索の最大の課題は、「適切な検索質問 (= 何を探したいか) を明確にすること」
  - 何を探したらよいかわからない
  - どう質問したらよいか、何を質問できるかわからない
  - 漠然とした情報ニーズをもったユーザ
  - とりあえず検索をしてあたりをつける

検索を導く支援が必要！

自然言語検索は利用者にとり簡単で使いやすいですが、検索の最大の課題は、どういう検索語で検索するかではなく、適切な検索質問、すなわち何を検索するのかを明確にすることです。そのため、漠然としたニーズを持つ利用者の検索をナビゲートする仕組みが必要だと考えられます。多くの分類、索引関係の研究者が言っていることですが、統制語彙において、今一番主要な役割は検索をナビゲートすることと言えます。

## 2. ナビゲーション：統制語彙の役割

### 2.1 ナビゲーション：統制語彙の新たな役割

#### ナビゲーション：統制語彙の新たな役割

- 検索において、統制語彙は
    - どのような情報資源にアクセスできるかを示唆
    - どう探せばよいか、どのような側面から質問できるか示唆
    - 検索語を自分で考えなくてよい
    - 漠然とした質問→検索結果を組織化
    - 検索する分野・範囲を限定する
- などにより、利用者を導く

#### サーチ & ブラウジングのシームレスな連続

先ほど白石さんのデモにあったように（p.37参照），件名にリンクがあると探せます。しかし，それが漠然とした言葉ならば検索結果が膨大な数になりますので，例えば，さらに，検索結果が分類されて出てくると 利用者は，そのなかで自分の関心にあったものを選択していくことによって，検索を絞りこめるようになります。これは，利用者の曖昧な検索ニーズを，システムとの対話を通じて次第に明らかにしていく意味で，非常に興味深い方向です。このような枠組みとして，統制語彙の役割が期待されています。

### 2.2 ナビゲーションのための統制語彙

ディレクトリ型検索エンジンの代表はYahoo!ですが，問題点は分類体系が一つしかないことです。しかも分類の基準がよくわからないので，難しさがあります。また，多くの場合，情報は複数の側面から記述できます。例えば，件名には時代区分や地理区分がありますが，複数の側面の組み合わせで，より正確に検索することができます。

DDC（Dewey Decimal Classification：デューイ十進分類法）やNDC（Nippon Decimal Classification：日本十進分類法）などの十進分類法の体系は硬直化しています。それに対し，ファセット分類<sup>23</sup>は新たな概念を複数の基本的属性の組み合わせで表現でき，柔軟性があると言えます。しかも一つ一つの分類基準は単純化しますから，利用者にもわかりやすいと思います。

## ナビゲーションのための統制語彙

- GUIで選択可能：
  - 上位階層の小規模な語彙でも十分
- マルチファセット
  - 多面的なアクセス、複数の側面の組み合わせ
- 特にネットワーク情報資源の場合、
  - 情報資源のタイプ、ジャンル
  - 他の統制語彙、オントロジーとのマッピング

また、わかりやすさからいえばグラフィカル・ユーザ・インタフェース(GUI)が必要になります。GUIと検索技術との組み合わせにより、小規模な統制語彙の上位の階層だけでも十分活用可能です。

さらに求められるのは、他の統制語彙とのマッピングです。統制語彙が一つのオントロジー<sup>24)</sup>を反映しているとすれば、小学生あるいは研究者のニーズに合った統制語彙があると思います。そして、統制語彙間のマッピングは、他のデータベースとのインターオペラビリティ(interoperability: 相互運用性)の意味でも大変興味深いところです。先ほどNDLの新しい件名標目表では、NDCからも、LCSH(Library of Congress Subject Heading: LC件名標目表)からも探せるというお話でしたが、マッピングの体制が整えられることは大変興味深いと思います。

### 3 . 検索インタフェース

検索インタフェースは、「Multi-facets , 多面的な検索ができること」,「Controllable , 利用者が迷子にならないこと , つまり , この操作で何ができるのかわかる , あるいは困ったら元に戻る事ができること」さらに「Search & Browsing , 検索とブラウジングを繰り返してできること」が求められます。

#### 3 . 1 マルチファセット型インタフェース

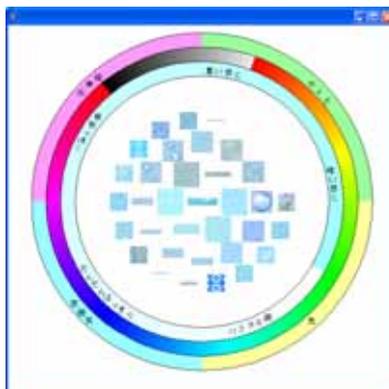


マルチファセット型ではカリフォルニア大学の Marti Hearst らが開発した Flamenco の例があります。例えば、この建築関係の画像データベースでは、メディア、場所、年代、テーマ、建造物の種別など、複数の側面を組み合わせることで検索ができます。このように、複数のファセットを維持しながら自由に検索し、検索結果が付与されている統制語彙によって分類されるという形で、ブラウジングとサーチがシームレスに続いていきます。

次にもう一つ、これは私の研究室の梶山さんという学生が開発した、Concentric Ring View の例です。検索キーにあたるものを複数のリング状に並べ、星座早見盤のようにリングをまわして検索条件を調節すると、組み合わせた結果が表示されるという仕組みです。

## マルチファセット型検索インタフェースの例 Concentric Ring View (T. Kajiyama, et al)

- GUI
  - カテゴリリング
    - 属性を検索の切り口
  - キーリング
    - カテゴリに対するキーの整列
    - キー = リング下部  
(リング数に応じて変化)
    - 優先順位
- 情報の表示
  - 重み付けに基づく
  - 中心から同心円上に配置
  - 単純拡大



### 4 . 国立情報学研究所メタデータ・データベース共同構築事業とメタデータ語彙集

国立情報学研究所では、大学図書館と共同でネットワーク上の情報資源のメタデータ・データベース<sup>25)</sup>を開発し、簡略な統制語彙集を作りました。

#### 4 . 1 国立情報学研究所メタデータ語彙集

### 国立情報学研究所メタデータ語彙集

- 国立情報学研究所メタデータ・データベース共同構築事業における統制語彙
  - 主題語彙集、時代語彙集、地理語彙集、資源タイプ語彙集
  - NIIメタデータ記述要素において、それぞれ、Subject、Coverage ( Temporal )、Coverage ( Spatial )、Typeの語彙として適用される
  - 検索では、4つのファセットがディレクトリとして機能 + 機関名からの検索、しぼりこみが可能

主題、時代、地理、資源タイプ(図2参照)、の四つのファセットからなっています。Dublin Core

にそったメタデータ記述要素の Subject , Temporal , Spatial , Type に適用されるものです。そのほか Subject には , LCSH と NDC を使用するスキーマとして選択しています。そのため , LCSH を日本語に翻訳し , LCSH 付与を支援する仕組みを作りました。

図 2 . 資源タイプ語彙集 ( N I I )

<ul style="list-style-type: none"> <li>研究成果           <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 論文</li> <li>・ 論文以外</li> </ul> </li> <li>研究成果リスト           <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 逐次刊行物</li> <li>・ 論文リスト</li> <li>・ プロジェクト関連情報</li> <li>・ 講演会等</li> </ul> </li> <li>研究資源           <ul style="list-style-type: none"> <li>・ データ</li> <li>・ ソフトウェア</li> <li>・ 電子的辞書等</li> </ul> </li> <li>研究者情報           <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 個人のページ</li> <li>・ 研究室トップページ</li> <li>・ 研究者情報リスト</li> <li>・ 研究者情報データベース</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>教育情報           <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 講義情報リスト</li> <li>・ 電子教材リスト</li> </ul> </li> <li>図書館情報           <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 図書館・室トップページ</li> <li>・ 図書館資料</li> </ul> </li> <li>デジタルミュージアム</li> <li>参考情報           <ul style="list-style-type: none"> <li>・ データベース</li> <li>・ 文献目録・文献索引</li> <li>・ リンク集・電子ジャーナル集</li> <li>・ メーリングリスト</li> </ul> </li> <li>広報資料           <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 機関トップページ</li> <li>・ 下部組織トップページ</li> <li>・ 機関広報資料</li> </ul> </li> </ul>
---	---

検索は、主題、時代、地理、資源タイプ、機関名の五つのディレクトリからできるようになっています。例えば「生命科学」という主題を選ぶと、まず資源タイプ別に「研究成果」、「研究資源」、「研究者情報」などに分かれて結果が表示されます。さらに、主題が細分化され「生命科学」の下位領域にいくつかあります。例えば、「参考情報」という資源タイプをクリックすると、そこが細分化されて、いろいろなデータベースが見られます。

このように、検索結果は様々な側面から細分化されていき、曖昧なニーズの利用者をしだいにより関心があるほうに導くことができます。技術的には、クラスタリングとって、検索結果中の似たもの同士をグループ化する方法もありますが、調査によれば、その都度、分類の基準が変わるクラスタリングより、ある一定のスタティックな分類体系に従って検索結果が分類されるほうが利用者は安心感をもつ、という結果が出ています。

#### 4.2 ファセット化統制語彙の例

自然言語のキーワードで検索できるサーチエンジン全盛の現在、なぜ統制語彙かという議論がありますが、ナビゲートする仕組みには統制語彙が必要です。他のファセット化した統制語彙を用いる例として、アメリカの国立医学図書館の「MeSH」<sup>26)</sup>があります。「MeSH」では、約 15 のファセッ

トがあります。例えば、病気についての文献を索引する場合、必ず病気の部位と病名を組み合わせで索引するなどというルールがあり、ファセットが索引者を導き、かつ検索方法をも示す仕組みになっています。他にも、LCSHを再構築した「Arts and Architecture Thesaurus (AAT)」<sup>27)</sup>があります。「AAT」では、感性、物理的特性、年代と様式、材料、行為などの複数のファセットで主題を記述します。このように分野を限定すると、主題をどう記述すればよいかにより明確になります。

## FAST: Faceted Application of Subject Terminology

### ファセット

- Topical
- Geographics
- Personal and Corporate Names
- Form
- Chronological

ネットワーク情報資源のため

付与規則の単純化、チェックプログラムの単純化

また、先ほどから度々出てきたFAST<sup>6)</sup>というのは、LCとOCLCが協力して行っている事業です。ネットワーク情報資源の索引づけのために、件名標目表の細目を廃し、別々のファセットとすることで付与規則を単純化しています。

## 5. 国立国会図書館件名標目表への期待

### 国立国会図書館件名標目表への期待

#### 統制語彙の要件

- 語彙の統制（同義語、関連語の管理）
- 語彙の規模、範囲
- 更新
- 使いやすさ
  - ・索引
  - ・検索、アクセシビリティ
- ナビゲート向けの機能
  - ・ファセット化
  - ・他の統制語彙とのマッピング

### 国立国会図書館件名標目表への期待

なぜLCSH? (FAST, NII Meta)

- 世界最大の一般主題用語
- 同義語、homographの統制あり
- 豊富な相互参照
- MARCと共通。各国語に翻訳。広く使われている
- 独自に統制語彙作成・維持の手間がはぶける

デメリット

- ・ LCSHはカード目録用。シンタックスが複雑
- ・ ナビゲート向け機能がない
- ・ 文化の差、統制語彙はオントロジ = ものの見方

国立国会図書館の件名標目表については、語彙の統制、語彙の規模と範囲、更新の頻度、使いやすさ、さらにナビゲート向けの機能があることが期待されると思います。今日は、語彙の統制、規模の拡大、更新をがんばりますというお話でしたので、私が申しあげることはないんですが、ぜひとも使いやすさにおいては、利用者の側から見たプラグマティックスを考えていただきたいと思い

ます。先ほど柴田先生からは、検索システムの中に組み込むというお話が出ていました。件名標目表を公開してだれも見られるようにすることは、アクセシビリティを高める一つの手順だと思えますが、さらにナビゲート向けの機能を考えていただけるとよいと思います。もう一つは、他の統制語彙とのマッピングです。例えば、子どもならば、子どもに合った言葉で探せることが重要になりますので、他の統制語彙とのマッピングが進むとより使いやすくなると思います。

なぜ、FAST や NII (国立情報学研究所) のメタデータ・データベースが LCSH を使ったかといえば、その時点では、世界最大の一般的な主題用語で、きちんと維持管理されていたからです。デメリットはシンタックスが複雑でナビゲート向けの機能がないことでしたので、NII ではそれを改善しました。もう一つのデメリットは、文化の差です。アメリカで開発されたものですので、いくら日本語で件名を検索するインタフェースを作ったとしても、やはり日本人のものの見方と違うわけです。それを考えると、日本で最大規模の図書を実際に分類している図書館である国立国会図書館が作る統制語彙は、今後は、更新を頻繁に行う方針とうかがい、非常に期待が高いと思います。ぜひ今後の改訂について、さらにご検討を進めていただければありがたいと思います。

## 報告

### TRCにおける件名標目

松木 暢子（株式会社図書館流通センター）

TRC（図書館流通センター）において、NDLSH（国立国会図書館件名標目表）、BSH（基本件名標目表）からどのように件名標目を採用しているかという、実務現場の話をしたと思います。

#### 1．TRC件名標目の選択

まず、TRCの件名標目を何から選択しているかですが、基本的にはBSHから採用しています。現在は第3版と第4版の併用になっています。次にNDLSH第5版から採用しています。第5版は1991年の出版ですので、ウェブ公開後はウェブからも採用しています。該当図書が出版された段階でNDL-OPACから採用することもあれば、2ヶ月に1回掲載される新設件名標目一覧表を検討して採用という場合もあります。

NDLSHから採用する場合は、基本的にNDLSHの細目は採用しておりません。理由はBSHと形が異なるものがあるためです。例外的に採用しているのは、時代区分です。「世界史」の例でいえば、近代以降を示す時代区分は、BSHでは「世界史 - 近代」のみですが、「世界史 - 20世紀」などの時代区分をNDLSHから採用しています。また、BSHの表現形式とNDLSHの表現形式はかなり異なります。その辺もBSHをベースにしていますので、BSHの表現形式に合わせてNDLSHの形を変更して、TRCとして新設する場合があります。

三つ目に、どちらにもない新主題のものもたくさん出版されますので、そちらについては各種辞書類を参照して新設することもしています。また、BSHの参照語には、BSH刊行時には参照語でよかったけれども、今となっては標目としたほうがいいものもあるかと思しますので、必要に応じて標目として採用しています。

地名件名および作品件名を除いた、普通件名の統一標目における割合を調査したところ、BSHから採用した件名標目が50%、NDLSHから採用した件名標目が26%、TRCの新設が24%となっています。

#### 2．TRC件名標目の歴史（BSHを中心に）

BSHとの関連で、TRC件名標目の歴史的なことを申し上げますと、件名標目はMARC作成開始当初から付与しております（図3参照）。1991年4月に、件名標目委員会にTRCで新設した件名標目の送付を開始しました。この年の12月にNDLSHの第5版が出版されておりますので、1992年以降はNDLSH第4版にかわってNDLSH第5版から採用するものが多くなりました。件名標目委員会に送付

した新設件名標目のうち、約7割から8割がNDLSHから採用したものです。件名標目委員会へは、BSHで採録が省略されている「例示件名標目」(疾患名など)「固有名詞件名標目」(条約・協定名など)は、送付しておりませんので、先ほど申し上げたTRC普通件名統一標目におけるNDLSHの割合と件名標目委員会へ送付した件名標目中のNDLSHの割合は、異なります。

1999年7月にBSH第4版が刊行されました。BSH第4版は、BSH第3版と比較して、細目もかなり増えましたし、カタカナの表記では中黒を使わないとか、いろいろな意味で大幅な変更がありましたので、2000年11月にBSH第4版の採用方針を、全国の図書館にお知らせし、2001年より適用を開始いたしました。大きな変更点は、個々の法律名を2001年から採用し始めたことです。この時点では、「婦人」と「女性」など、一対一対応で言葉が変更されたものについては、採用を見送っております。

また、第4版の採用方針とともに、コンピュータ関連の件名標目の採用方針についてのアンケートのご協力を図書館にお願いしました。回収率は、低かったのですが、その結果を反映して、2002年1月よりコンピュータ関連の件名標目をかなり新設いたしました。件名標目を新設した場合は、過去のMARCにさかのぼってメンテナンスすることを原則にしておりますので、コンピュータ関連の件名標目を新設すると同時に「電子計算機」などが付与されていた1,2万件のMARCについて、1件ずつのMARCを確認しながらメンテナンスを開始いたしました。ようやく最近、このメンテナンスが完了したところです。

それから、TRCのTOOLi(ツールアイ)<sup>28)</sup>という図書館向け検索システムでは件名典拠ファイルを公開しておりますが、実際にはまだ図書館に提供しておりません。2005年1月に「件名典拠ファイルT」という形で提供を開始いたします。この件名典拠ファイルの提供を機会に、BSH第4版で一対一対応の形で変更された「婦人」と「女性」、「マーケティング」と「マーケティング」等につきましても、2005年1月に、全面的に置き換えをして提供します。すでに提供している累積MARCの修正についてはTRC MARCナンバーと件名標目の対応テーブルを作成して、ご提供する予定であります。

図3 . T R C 件名標目の歴史

TRC 件名標目の歴史	
BSH 関連を中心に	
1991年4月	日本図書館協会件名標目委員会(以下、件名標目委員会)へ新設件名標目の送付開始(BSH第3版の件名標目以外の普通件名標目(例示件名標目・固有名詞件名標目除く)を対象) 送付新設件名標目の約7~8割は、NDLSHより採用したもの
1993年1月	上記新設件名標目に対する件名標目委員会よりの件名標目訂正を「TRC MARC ニュース」上に掲載開始
1998年3月	件名標目委員会への新設件名標目送付休止(件名標目委員会のBSH第4版編集作業のため)

図3 . T R C 件名標目の歴史 ( 続 )

2000 年 11 月	B S H 第 4 版の適用方針を「TRC MARC ニュース 第 20 号」上に掲載 ( B S H 第 4 版で言葉の慣用の変化により表現が改められた件名標目 ( 例 : 婦人女性 ) については、採用を見送り )
2005 年 1 月 [ 予定 ]	TRC 件名典拠ファイル提供開始 TRC MARC / T タイプ上で、件名典拠 ID を提供開始 2000 年 11 月に採用を見送った“ B S H 第 4 版で言葉の慣用の変化により表現が改められた件名標目 ”を採用 ( すでに提供している累積 MARC の修正については、対応テーブルを提供 )

### 3 . T R C 件名典拠ファイル

次に、TRC 件名典拠ファイルの件名典拠 ID 体系 ( 図 4 参照 ) と、データ要素一覧 ( 図 5 参照 ) を挙げました。さらに、件名標目の参考例として「GPS」( 図 6 参照 )、地球観測システムですが、これを挙げておきました。件名標目を新設する際には、何種類かの辞書を参照しますので、それらを参照した結果、形がそれぞれ違っていれば、参照語を作成することを原則にしています。

図 4 . 典拠 ID 体系 ( T R C )

5	1~3			
1 桁目	2 桁目	3~7 桁目	8~11 桁目	12~15 桁目
1 桁目	典拠種別 5 が件名標目を現す ( 個人名・団体名は除く )			
2 桁目	データ種別			
	1 : 普通件名    2 : 地名件名    3 : 作品件名			
3~7 桁目	個別番号			
8~11 桁目	細目			
	0000	細目なし		
	1001~2000	細目 ( 一般細目・分野ごとの共通細目等地名細目以外 )		
	2001~9999	地名細目		
12~15 桁目	形態番号			
	0000	統一標目		
	4001~6000	参照形 ( 典拠ファイル上にのみある、をみよ参照 )		

図5 . データ要素一覧 ( T R C )

000	A	データレベル*	*印は図4のデータ例では省略
000	L	更新レベル*	
001	A	典拠 I D	
005	A	最終更新日付*	
100	A	一般的処理データ*	
152	A	目録規則*	
215	A	地名件名漢字形	
	K	地名件名カタカナ形	
	X	地名件名ローマ字形*	
230	A	作品件名漢字形	
	K	作品件名カタカナ形	
	X	作品件名ローマ字形*	
250	A	普通件名漢字形	
	K	普通件名カタカナ形	
	X	普通件名ローマ字形*	
305	A	SA ( B S H 第 4 版 参 照 注 記 )	
315	A	地理区分	
320	A	備考 ( B S H 第 4 版 説 明 つ き 参 照 )	
330	A	S N O T E ( B S H )	
	B	S N O T E ( T R C )	
350	A	種別 ( 例 示 件 名 標 目 ・ 固 有 名 詞 件 名 標 目 の 各 グ ル ー プ を コ ー ド 化 )	
	B	概念	
	C	人名 I D ( 作 品 件 名 標 目 の 著 者 典 拠 I D , 「 - 小 説 」 の 人 名 典 拠 I D )	
	D	地域コード [ 予 定 ]	
515	A	相互参照	
687	C	参照分類 ( T R C )	
687	E	参照分類 ( B S H )	
801	A	レコード作成機関 ( 国 名 ) *	
	B	レコード作成機関 ( 機 関 名 ) *	
	C	レコード提供年月日*	
802	B	出典コード ( カ タ カ ナ 形 )	
	D	出典コード ( 漢 字 形 )	
	F	出典コード ( 概 念 )	
	H	出自	

図6 . 件名標目 - データ例 ( T R C )

<b>001\$A01</b>	<b>5 1 1 5 7 1 5 0 0 0 0 <u>0 0 0 0</u></b>
250\$A01	G P S
250\$K01	ジーピーエス
802\$H01	W 注) N D L S H 件名標目 ( N D L - O P A C )
687\$C01	5 4 7 . 6 6
802\$F01	3 2 1 3 注) 現代用語の基礎知識
350\$B01	電波源として複数の人工衛星を用いて位置決定を行うシステム
<b>001\$A01</b>	<b>5 1 1 5 7 1 5 0 0 0 0 <u>4 0 0 1</u></b>
250\$A01	汎世界測位システム
250\$K01	ハンセカイ / ソクイ / システム
802\$H01	Z 注) T R C 参照語
802\$D01	3 2 1 3
<b>001\$A01</b>	<b>5 1 1 5 7 1 5 0 0 0 0 <u>4 0 0 2</u></b>
250\$A01	全地球測位システム
250\$K01	ゼンチキュウ / ソクイ / システム
802\$H01	Y 注) N D L S H 参照語
<b>001\$A01</b>	<b>5 1 1 5 7 1 5 0 0 0 0 <u>4 0 0 3</u></b>
250\$A01	汎地球測位システム
250\$K01	ハンチキュウ / ソクイ / システム
802\$H01	Z
802\$D01	3 2 4 3 注) 知恵蔵
<b>001\$A01</b>	<b>5 1 1 5 7 1 5 0 0 0 0 <u>4 0 0 4</u></b>
250\$A01	全地球無線測位システム
250\$K01	ゼンチキュウ / ムセン / ソクイ / システム
802\$H01	Y
<b>001\$A01</b>	<b>5 1 1 5 7 1 5 0 0 0 0 <u>4 0 0 5</u></b>
250\$A01	衛星航法システム
250\$K01	エイセイ / コウホウ / システム
802\$H01	Y
<b>001\$A01</b>	<b>5 1 1 5 7 1 5 0 0 0 0 <u>4 0 0 6</u></b>
250\$A01	G P S
250\$K01	G P S
802\$H01	W

#### 4 . NDLSHマニュアル公開への希望

##### 件名標目新設の基準

##### 件名標目表現形式の方針

e x . 常用語優先 ( BSH ), 学術用語優先 ( NDLSH )

##### 固有名詞件名標目の採用基準

##### アルファベット略語の採用基準

e x . 構内情報通信システム ( BSH ), LAN ( NDLSH )

CAI ( BSH ), コンピュータ教育 ( NDLSH )

##### 細目の適用指針および判断基準

e x . ・「美術」「舞踊」「演劇」「芸術」「絵画」「建築」「音楽」「陶磁器」「彫刻」  
の各様式 ( 日本様式・東洋様式・イスラム様式・西洋様式 ) を丸括弧で  
付記する

・地域が特定できる場合 , 対象となる件名を地理区分する

( 例 : 美術 - トルコ NDLSH )

##### 名称典拠との棲み分け基準

最後に , NDLSH マニュアル公開への希望ということで , 何項目か挙げましたが , 公開しますよというお話を先ほど伺いましたので , ご覧いただければと思います。一つ申しあげるならば , 詳細なマニュアルを公開していただけると , 私ども実務をする立場としては , ととても助かりますので , お願ひしたいと思います。

## 質疑応答・討議

コーディネーター : 上田 修一  
司 会 : 大柴 忠彦

**大柴** ここからは、国立情報学研究所の大場さん、都立中央図書館の白石さん、それから日販図書館サービスの百足山さんのお三方にも加わっていただいて、質疑応答・討議を始めたいと思います。現在の日本で件名に深く関わっている方々が一堂に会して、件名標目について語るという事件性、出来事性を重視したいと思っています。

先ほどから、利用者からの視点に基づいた件名標目表というお話が出ていました。そこで、このメンバーの中ではいちばん利用者サイドに近い立場でいらっしゃいます、都立中央図書館の白石さんに口火を切っていただきたいと思います。

**白石（英）** 都立図書館では自館で件名を付けるという作業は少なくなっているのですが、公共図書館の状況の一端がおわかりいただけるのではという視点で、お話しさせていただきます。

私どもの図書館では、TRC MARC、それから JAPAN/MARC を大いに使わせていただいております。はっきりした調査の結果ではなく、経験値によるものですが、TRC MARC の利用が受け入れ冊数のほぼ 7 割弱、それから残りの 3 割のうちの半分が JAPAN/MARC、これは最近やや早くなりましたので、半分を上回ってきているかと思えます。その残りというのが、MARC の無い行政資料や東京都の地域資料、それと利用者に提供する時期までに MARC が間に合わないものであり、そのデータを独自作成しております。その独自作成部分について件名を付与していますが、それは BSH 第 4 版によっております。

2000 年の第 2 次都立図書館システム稼働後は、MARC を最大限利用するというのが大前提ですので、TRC MARC を利用するものについては TRC 件名を全部取り込んでいます。MARC 利用では、多くの場合まず TRC MARC が来て、その後 JAPAN/MARC ができてくるので、その場合は追加で取り込む JAPAN/MARC データのひとつとして件名も取り込んでおります。したがって都立図書館の多くの書誌データには TRC 件名、NDLSH の両方が並んでいます。

それから、MARC の件名では不十分と判断して都立図書館で件名を追加付与するケースも、少しあります。当館のデータを見ていただければわかりますが、BSH の第 3 版、第 4 版、そして NDLSH という 3 種類の件名標目表による件名が、群雄割拠しているという状態です。アクセスポイントが豊富であるという見方もできますが、統制語であるべき件名に不統一があるわけです。それから先ほどからもお話に出ていましたが、公共図書館では検索システムもパッケージをそのまま使っている場合が多いため、システム内部でどのように件名が検索されているかというのは、おそらく多くの図書館員自身が説明できないと思います。つまり、自館で使っている MARC データの件名がどういう基準で付与されていて、システムでどういうふうに検索されているかということは、ブラックボッ

クス状態になっていることが多いと思います。都立図書館の場合もいろいろカスタマイズはしていますが、さまざまな検索要求に対して十分対応できているとは言えない状況にあります。

それからデータの問題で言いますと、あくまで収集・整理の最初の段階で MARC を取り込むだけで、あとは都立図書館の規則に基づく加工もしていますので、MARC の更新データは一切入手していません。ですから先ほど TRC の松木様から 2005 年に一斉に遡及して件名を付け替えるというお話がありましたけれど、そういうメリットは受けられない状況にあります。

自館では一切手をつけないということで割り切って、全面的に MARC を使って更新データも取り込んでいる図書館では、そこがうまく更新されていくんだらうと思いつつ、お話を聞いていました。やはり、件名検索というのは、一般の利用者にとっては何ができるのかわからない部分です。ですからデータはこうなっている、また検索はこういうふうに行けると説明していくのが、本来図書館員の役割だと思うのですが、都立図書館でも現在利用者の方に件名については十分説明しきれていませんし、これは多くの公共図書館の状況でもあると思っています。

第 2 次都立図書館システムの当初は、これからは主題検索の時代ということでバラ色の未来を描き、件名付与作業に力を入れて行こうとスタートしました。稼働直後はまだ蓄積も少ないので、今後に向けてまず取り込んだ MARC のデータ、それから自館作成のデータを蓄積し、いずれは検索システムの整備もと考えていたのですが、昨今の事情ではそういう明るい未来はとて考えられないようです。

そうしますと、1 館で何かする、例えば都立図書館のように並立している 3 種類の件名を自館で何かコントロールするというのは全く不可能な話ですので、NDLSH、TRC の件名、そして BSH を何かの形で統合して一本化する仕組みができて、それを都立図書館のシステムに反映できれば一番いいかと思いつつ、お話を伺っていました。

**大柴** 問題点が三つ提示されました。一つは件名が群雄割拠している。端的に言うと、BSH と TRC と NDLSH が乱立、並立しているという問題ですね。それからシステム上の問題、これも前半の報告でもあったと思います。それから明るい未来がないという、将来暗いという話がありました。その一番最初の問題は当然出ざるを得ない問題かと、覚悟はしていました。いわば国内標準件名として、一本ビッシとしたものがないというのが実情だと思います。それについて、上田先生、まず今 BSH と NDLSH が存在している、ここを何とかしたほうがいいのか、あるいはそのまま、調整を続けながら並行していったほうがいいのかということですが、いかがでしょうか。

**上田** 実は TRC MARC の件名の中に、BSH と NDLSH とが組み合わさって存在しているという実情を理解していませんでした。今の都立中央図書館のお話では TRC MARC が 70% ということですが、その 70% の中にまた BSH と NDLSH があるという複雑なことになってしまっているわけですね。そうすると公共図書館はほとんどがそうした状況のはずですし、先ほど私の調査 (p. 5 参照) でお見せしましたように、大学図書館も同様なので、結局日本の中で統一された一つの件名標目表を使っているのは、国立国会図書館しかないということになりかねません。さらに言えば、それでも支障が起き

ていないようです。国立国会図書館が、NDLSH と ISBN を組み合わせたデータを提供して各図書館がそれをもとに件名フィールドを入れ替えるというような方法もあるかと思いますが、どうなのでしょう。

もう一つは、今後のことを考えて、TRC や日販と国立国会図書館の協力体制を作って、統一した件名標目表を作って使うということも案としては考えられます。ただ、TRC や日販が目録データの提供で果たしている役割が極めて大きいという実状を認識した上で考える必要があります。これは別に件名だけの話ではなく、目録データをどう入手するかということがどうしてもかかわってきます。

**大柴** 件名標目委員長として柴田先生、いかがでしょうか。

**柴田** 今のお話を聞きながら、もしかしたらシステムを少し変える必要もあるが、BSH の何番の件名標目というようなことを、図書館の各館のデータの中に持ち込むというようなことをすることで、少し様子は変わるんじゃないかなという気がします。それから、BSH の改訂版を作る過程でも公表してるわけですが、TRC に大いにお手伝いいただいたということと、JAPAN/MARC が持っていた件名標目表をどんどん取り込んだことです。例えば細目にしても、かなり NDLSH を入れました。その結果非常に近くなってきたけど、やっぱり BSH は BSH を選ぶというふうに今思ってるんです。BSH はどちらかということの後を考えると、学校とのつながりを重視していくという流れを作らざるを得ないだろう。あと、今日話を聞きながら考えたことなんですが、BSH にしても NDLSH にしても、結局、大きな世界を見るんですね。各図書館からすると、大きな世界の一部分を切り取って、自分の世界を作っている。その自分の世界の蔵書というものと、それから利用者が、つながってるんだけど、利用者にとっては大きな世界の BSH、NDLSH というのは見えても、あんまり役に立たない世界ではないかというようなことを考えています。

**大柴** このテーマで、他にご発言ございますか。

**神門** 私も TRC MARC に2種類の件名標目表が混在しているということをよく知らなかったので、大変勉強になりました。私はまず一つは、今混在してるとしても、ないよりはあるほうがずっといいと思っています。というのは、先ほどから申し上げたように、検索の技術、検索エンジンの技術で、統一した統制語彙ではなくても、何か主題からのアクセスポイントがたくさんついていれば、検索がうまくいく可能性があるからです。

それから、ついでとすれば、上田先生の調査でもありましたけれども、1語や2語じゃなくて、もう少したくさんついてほしいというのがありまして、あと件名標目の一つの役割は上田先生の話でもありましたけども、チャン<sup>1)</sup>が言っているように、キーワードというか、書名とか、目録データというのは主題からのアクセスとしてはとても情報が少ないものです。書名だけでは表せない、何についての本かという言葉の補いをするのが、件名の一つの大きな役割だと思いますの

で、そういう意味から、ぜひ付与語彙数が増えてほしいと思います。

あと、マッピングということに関しては、先月、IFLAのClassification and Indexing<sup>29)</sup>の常任委員会に出席して聞いたことですが、OCLCとLCでDDC (Dewey Decimal Classification: デューイ十進分類法)を毎回更新するときに、DDCも簡略版、それからウェブ検索向けの簡略版、それから学校向けのDDC、そして、そういったものを全部マッピングして、それからLCSHともマッピングをし、それからシアーズの件名標目表<sup>8)</sup>、それからカッター・サンボーンの著者記号表<sup>30)</sup>ともマッピングをするというような形で、常にいろいろなものとの関連付けを保っていくという方向で、さらに関連を広げようとしているというようなことがあります。

一本にまとめるというのも一つかもしれませんが、相互に関連付けを行うというのも、一つの方向ではないかと思います。NIIのメタデータの語彙集というのも、LCSHとそれからDDCとNDCとマッピングが取れるような形になっています。語彙集自体は非常に簡略な、大体3階層ぐらいのものではありますが、今はデータが少ないということもあり、端緒としてはそういったことも可能であるだろうということを考えます。

**大柴** 要するに、一本化した形でやっていくのか、あるいは並立したものをマッピングという形で運用していくかというのは、今すぐ結論が出る問題ではないですし、これから長い時間をかけて検討していかなければいけない問題になると思います。先ほど事件性を大切にしたいと申しましたように、そういう話がこの場でこういう形で出たということが、重要だと思いますので、忘れないでいきたいと思います。

では、先ほど、私あるいは白石の方からNDLの件名改訂について報告いたしました。これについて、ご意見、ご質問等を伺いたいのので、NDLの件名改訂についてご質問あるいはご要望でも結構ですので、忌憚なくお願いします。

**松木** 先ほどTRCでは過去に遡って全てメンテナンスいたしますというお話をさせていただいたんですけど、NDLSHの場合、過去に遡ってメンテナンスする場合と、しない場合があったと思います。過去に採用した件名標目で、現在は使用しない件名標目というのが、この公開される件名標目表の中でどういうふうな位置付けになって、どういうふうに表示されるのかを教えていただければと思うんですが。

**白石(郁)** 現在使われていない件名標目であるという表示は特にはないんですけども、ただ、今回の改訂作業にあたりまして、現在は使っていないけれども、今まで訂正ができなかったものというものに関して、まとめてデータの整備を行いまして、可能な限りほかの件名に統合する、あるいは参照語に落とすという措置をとりました。ですから現在使われていないけど存在している件名というのは、基本的にはありません。

**大柴** 見逃しや取りこぼしが、あるかもしれないということとは？

**白石（郁）** そういうのもあるかもしれませんが、できる限りのデータ整備は行ったうえで今回公開します。ですので、特に現在使われていないというような表示は考えておりません。

**柴田** 確かに表はそれでいいんでしょうけれども、現場の図書館側では困るんじゃないですか。すでにもうそのデータは持ってるんです。すでに持ってるデータをどう変えるかということと同時に考えなければいけないというのが、私の立場なんですよ。

**神門** 柴田先生に加えてなんですけれども、例えば先ほどご紹介したMeSH<sup>26)</sup>のシソーラスでは（p.54参照）、変更の履歴というのがずっと公開され、新しい語を作れば、それは今までの件名では、これとこれとこれを組み合わせると大体これになりますよってというようなことが、公開されてくるわけです。そうすると、図書館が遡及的に変換しないとしても、その関係が明らかになっている、それからこれはいつできた件名で、これがない場合は、これとこれの組み合わせで検索できるという、履歴の情報が非常に重要かと思います。

**白石（英）** 現場の図書館の立場で言うと、やはり履歴があっても利用者の検索からは直接正しい現在の件名にたどり着けるとは思えません。先ほどのナビゲーションということから考えますと、一般の利用者に最もいいのはやはりシソーラス、そういうことが可能なのかわかりませんが、NDLSH, BSH, TRC の件名全てを統合したようなシソーラスがあれば、そこから件名にナビゲートされると思います。それなくしては、件名が何かということがよく分からないような利用者に件名検索をしてもらおうというのは不可能だと思います。

**神門** 確かに件名をコントロール・ボキャブラリーとして検索に使うということであれば、どれか一つというのは大事なんですけれども、先ほど申し上げたのは、検索の技術が進歩していることを考えると、履歴を使うのであれば、検索システムを開発するところでうまく使ってくださいって言って、投げちゃうって方法が一つあります。それから、統一されてないのが群雄割拠しているとしても、例えば検索をしたレコードからそれに関連あるもの、それと似たものを探すという技術もあるわけです。例えばNIIのWebcat Plus<sup>31)</sup>というものですが、それは目録データが、それだけでは主題情報が少ないので、目次情報とかの本の帯の情報などを追加して、主題情報を増やします。そうすると、この目録データとこの本についての記述と似たものを探すことができるんですね。そうするとキーワード、その件名自体が違っていても、例えば件名が3語付与されていて、1語は新しいものだったり、あるいは体系が違ったり、違う形で表れていたとしても、ほかの2語、あるいはタイトル中に出てくる言葉が同じであれば、すごく似たものとして探せる可能性が高いわけです。そういう検索技術側の進歩で、カバーできる可能性はあるので、あまり悲観的になることはなくて、将来は明るいと思うんです。まずは、そういう基になるデータがあるということが、何よりも大事だと思います。

**大柴** まず、NDLの件名を変更したり、あるいは新設した場合の過去データとの齟齬の問題ですが、可能な限り遡及して訂正しているということが一つあります。それから、典拠ファイルそのものにかつて付与していた件名の記録がありますから、その情報をどうやって公開していくかという問題にもかかわってくると思うんです。

例えば「データベース」という件名を作ったのが2002年でしたが、当然その前からデータベースに関する本というのはたくさんあって、それには「データ処理」と「データ管理」という件名を付けていました。「データベース」という件名を作ったときに、当然、その二つを掛け合わせたものを遡及して訂正すべきなんですが、なにしろ量が多い。それから、データを見ただけでは判別がつかないので、現物に当たらないといけないという問題がありました。結局、その場合は遡及訂正をやめてしまったんです。つまりOPACで言うと泣き別れているわけですね。果たしてそれでいいのかという問題はあるんですが、そこで立ち止まると、いつまでたっても「データベース」という件名を新設できないことになるんですね。

公共図書館などで困る場合があることは承知しているのですが、承知の上で、一步踏み出さざるを得なかったわけです。逆に言うと、今までそういう形で「データベース」という件名なり、「インターネット」という件名については、新しい概念に対応する件名を新設するタイミングがあまりにも遅かったので、今後はそういうことがないようにしていきたいということも、今回の改訂の方針の一つです。ですから、過去のデータとの齟齬があるというご指摘はごもっともですが、今後はそのようなことがないようにしていきたいというのが、現時点の回答になります。

**柴田** おっしゃることはわかるんですけどね。それをやればやるほど、現場は困っちゃうんですね。「をも見よ」参照みたいなものをどんどん取り込んで、利用者は「をも見よ」参照を見ることによって、過去のものに遡っていけるというようなことを、現場の図書館はしてもらわないと困るんですよ。そこが一番大事なんですよ。国立国会図書館が件名標目表の過去のデータを訂正することは、当たり前なことなんでしょうけれども、現場が混乱することになります。

**大柴** それはわかりますが、かといって、「データベース」という件名を、あるいは「インターネット」という件名をずっと作らなくていいのかという問題なんです。はかりにかけたときに、新しく作るという方向に踏み出したということです。今後は、そのようなご迷惑をかけることのないように、柔軟に新しい主題については対応していきたい。つまり、過去のデータに遡って大量の訂正が発生しないような形にしていきたいというのが、今回の大きな改訂方針の一つです。

**柴田** 小学校用に「バイオテクノロジー」という件名を作ってると言いました。「バイオテクノロジー」という件名があるということ子どもたちは小さいころから知ってます。ところが、中学・高校になってくると、ちょっとそれは違うだろうと。BSHの世界だったら、「あれは生物工学や」というふうに言われてしまう。私が言いたいのは、子どもたちが成長段階に応じて使う件名を変えていくことが、果たして必要なのかどうかですよ。そのことが非常に件名標目の将来には影響が

あるような気がしています。

**大柴** そのときに、複数の件名標目が乱立しているのか。あるいは乱立したものをマッチング、マッピングする形で関連付けていくのかということが、多分議論になってくると思います。ほかにNDLの件名改訂について、ご質問、ご意見等ございますでしょうか。

**上田** 都立中央図書館の白石さんがおっしゃった、将来が暗いということについてです。柴田先生が現場の図書館がおっしゃるのはとてもよくわかるんですが、実は現場の図書館は件名標目がこのようになっているということを知らないどころか、ほとんど関心がなくて、手に入った目録データをただ使っているだけである、そして、それ以上のことは、TRCや日販、それに図書館用パッケージメーカー任せである、という構図は、やはり暗いと思いますね。この問題はかなり根深いので、図書館が困りますと言ってくるのであればまだ救いがあるのではないかと思います。そうした声がほとんど出てこないことが心配だと私は思います。

別の話になりますが、NDL-OPACの件名というところをクリックすると、この画面(p.29参照)が出てくると理解してよいですね。すでに今でもこの画面ですよ。

**大柴** 先生がおっしゃるように、現在もNDL-OPACの件名検索で50音順の一覧がありますが、こちらは2004年10月に公開予定の「国立国会図書館件名標目表」の画面です。

**上田** 先ほどの神門先生のナビゲーションにかかわることですが、実はNIIのメタデータ・データベースのページを開いて探そうとすると、ちょっと萎えるのですが、それは、アイコンがわかりにくいからです。また、全体がどう構造化されてるかが、一目でわかりません。何が探せるのかもよくわからない。ウェブページを見たときに、誰もが本当に一瞬で判断してるんですね。数秒もかからないで、いろいろな判断をしてるという研究結果もあります。わずかな間に、このサイトは見るべきか見る必要はないかを決めてしまっています。トップページに到達して、この先、続けて見たいと思うかどうか、重要だと思います。今のページでは、これ以上何をすればよいのかよくわからないままで、これは関係なさそうだなと思う人が、おそらく多いのではないかと思います。ですから、このページに関して、もっといろいろ考えていただきたい。先ほどのNIIのメタデータ・データベースのことは矛盾するかもしれませんが、難しいかもしれませんが、もう少しビジュアル化して、次に何をすればいいのかがわかるようにしていただきたいと思います。

**大柴** 要するにナビゲーションというか、見栄えの問題といってもいいのかもしれないですね。上田先生の報告でも、あるいは神門先生の報告でも、Yahoo!やGoogleといったサーチエンジンになじんだ利用者に対して、例えばこの件名標目などを使ってもらおうというのは、ある意味、酷な話ではないかということにもなりますが。ただ、例えば、Yahoo!のディレクトリに対応するものとして、図書館界には分類表があるわけです。それから、Yahoo!やGoogleでも、キーワード検索というんで

すか、ロボット検索に対応するものとして、おそらく件名標目があると思います。ただ、それはもう、サーチエンジンになじんだ利用者に、分類表や件名標目表をこれがあるから使ってくださいというんではおそらくだめで、それがうまい具合に、検索システムの背後で働くような、ナビゲートしていくようなシステムを、考えていかなくはいけないということになると思います。ですから、それはその件名標目表の内容もさることながら、盛んに、いろいろな報告の中で話が出てきていますけど、システムとか、インタフェースとか、ナビゲートという問題にかかわってくると思われれます。

**大場** 確かに、NII のメタデータ・データベースの検索画面もわかりにくいところがあるかと思います。先ほど神門先生のほうから6万件というデータレコード数の報告がありましたが、実は登録レコード数は伸びておりません。メタデータという目録を取るという業務が、まず大学図書館にまだなじんでいないということと、また、レコードに件名が入っているものは非常に少ないということがあります。メタデータの主な機能は本文へのナビゲートですが、そのための件名ですとか、こうしたものを図書館員がどう考えているかということの文化がまだまだなんだろうと思います。ただ、担当者は非常に苦労してねばり強く平成16年度も広報、研修等を続けています。

それからもう一つ、実はまだ忙しくて手をつけられてないのですが、サブジェクト・ゲートウェイという企画<sup>32)</sup>を持っています。インターネット環境になって、大学図書館も今後かなり、リテラシー教育をメインにして、図書館の使い方、ネットワーク上の情報資源をどう検索し、使っていくかということに力を入れ始めています。それぞれの大学には、それぞれの特徴があり、その特徴を強調していくことが重要です。大学図書館も、何を学生、研究者にサービスするのかという、要するにもう昔のようにコンピュータはこういうふうに使うんですよというコンピュータ・リテラシーではなく、何をサービスしていくか、例えば、持っている蔵書関連情報やその図書館コレクションのサブジェクトにかかわるネットワーク上の様々な情報など、それらに関係するリテラシーが重要になってくると思います。先ほど柴田先生がおっしゃったように、全体ではなくて、それぞれの図書館が得意としているまたは力を入れている主題領域がその図書館の個性として発揮されているかどうか、これから問われてくるんだろうと思います。

そのときに図書館の一つのスキルとして、件名というものをどう使っていくのか。それがメタデータの一つの考え方なんだろうと思います。神門先生がおっしゃったように、ファセット的にマルチにいくつか切り分けていって、標準化していくということが、MARC等で必要なのは確かなのですが、それぞれの大学の個性として何を切り出していくのか。そういうことがこれから問われていくと思います。NII のメタデータ・データベースの検索画面は、まだ大学共同作成の規格として、NII 独自に、資源タイプとして、全体のリソースをこのような形で分けているので、特別な需要を持った利用者にもどのようにナビゲートしていくのかというスキルが、まだ確立できていない。それが課題であるという気がします。本当にサブジェクト・ゲートウェイに早く入っていければいいとは思いますが、そういう状況です。

**大柴** メタデータやサブジェクト・ゲートウェイの話が出ました。当館の電子図書館プロジェクトの話の前に、日販図書館サービスの百足山さん、NDL の件名改訂についてのご質問、ご意見、ご要望等ございますか。

**百足山** 日販 MARC では、今、件名を付与するときに、BSH の 3 版を基に、NDLSH の 5 版を参考にしながら、データ作成をしています。という意味では、TRC ともまたちょっと違う状況ですけども、BSH 第 4 版に関しては、今検討中という状況です。

先ほど NDLSH の新しい改訂のときに、新主題への積極的な対応とおっしゃっていました。新主題ですとか、新しく起きた事件に対しての件名なども載っていると思うのですが、そういった新しい言葉は、出た当初は言葉の揺れがあると思います。迅速に対応はしなければいけないのかもしれませんが、揺れというのがある程度の時間がたたないと収まらないと思うのですが、その辺りはどのようにお考えでしょうか。

**白石（郁）** 言葉の揺れに関しては、確におっしゃるとおりで、それもあって今まで新しい主題へは、比較的消極的だったのではないかと思います。ただ、事実、最近新しい主題の出現率が大変高くて、あっという間に書誌レコードの実績が増えてしまうというありさまで、言葉の揺れを恐れてしまうと、気付いたときには過去の「データベース」ですとか「インターネット」という件名の二の舞になってしまうというのが現状です。ですから、今は言葉の揺れは恐れずに、また、的確な日本語に直されていないまま流通していく概念が最近大変多いので、最近新設されたものは、今までそれほど採用されていなかったカタカナ語や、英語交じりの、例えば「eラーニング」、そういったカタカナ語が増えてしまうんですけども、それを避けていては、新しい主題に対応するのは無理であると考えて、新しい主題に対応するほうを優先させています。言葉の揺れというのは起こりうると思いますし、後になってから、社会で流通している言葉としては、古くなってしまう可能性はあると思うんですが、それはそのとき対応するしかないかと、割り切ることにいたしました。

**大柴** 当館の電子図書館プロジェクトに携わっている川鍋さん、ネットワーク系やあるいはサブジェクト・ゲートウェイの辺りの当館での進捗具合について、お願いします。

**川鍋** 当館では、平成10年度に電子図書館構想というものを作りまして、それを基に近代デジタルライブラリー<sup>33)</sup>や、WARP<sup>34)</sup>などの事業に取り組んでおります。また、2004年2月には「国立国会図書館電子図書館中期計画2004」<sup>35)</sup>を策定いたしました。この計画ではこれまでの実績と、それを基にどういうことを展開していくかということを目標として掲げております。

その中で大きいのは、政府の「e-Japan重点計画2004」<sup>36)</sup>における政府との協力関係についてです。一つは政府コンテンツの利用機会の拡大と保存を図るため国立国会図書館が政府情報を中心に収集する。もう一つはデジタル・アーカイブ・ポータルを構築するということです。収集面につきましては、現在、当館の納本制度審議会でも議論していただいているところですが、ネットワーク

系電子出版物に範囲を広げて収集する方向に進んでいくと思います。また収集した情報資源をどうするか、その膨大な情報資源をどのように組織化していくかが問題になります。

先ほどNIIの大場課長から、メタデータの作成業務というのが、なかなか現場の大学の図書館員にも根づいてないということで、2月にお越しいただいたときもそのご苦労を語っていただきましたが、私どもも政府情報から収集することになったときに、どういうサイトであるか、メタデータの作成をどうするか、その中でも主題についてはどうしたらいいかということをお考えしています。例えば思いついた言葉を件名として付けていただいて、背後で動く仕組みでカバーすればいいのか、簡易な語彙集を示して、そこから選択してもらうのか、そもそも付けてもらうという発想でいいのかどうか。神門先生のお話にありましたように、自動索引なり、サイト単位で、太い文字で書いてあるところを機械的に抽出して、それが主題（サブジェクト）とみなす方法もあるかと思っています。今はいろいろな方法を模索している状況です。

また、当館の件名標目表をネットワーク環境において使っていただくにはpdfでの公開よりはもう少しオープンに使ってもらえる形での公開が求められるのではないかと考えています。

**大柴** ありがとうございます。私の、つたないナビゲートではございましたが、質疑応答・討議はこれにて終了ということにしたいと思います。ご協力ありがとうございました。

## 注

---

- 1) Chan, Lois Mai. ケンタッキー大学図書館情報科学学校教授。FAST プロジェクト (注6 参照) のメンバーでもある。邦訳された著作に次のものがある。  
L.M.チャン著, 上田修一ほか訳. 目録と分類. 勁草書房, 1987, 418p. <国立国会図書館請求記号 UL611-32> (原書名 Cataloging and classification )
- 2) Functional Requirements for Bibliographic Records の略。書誌レコードの機能要件。IFLA の研究グループが提示した目録の概念モデル。目録の目的・機能を利用者の視点から再構成し, 求める資料を, タイトルや著作者だけでなく媒体などからも簡単に選ぶことができることを目指す。  
<<http://www.ifla.org/VII/s13/frbr/frbr.htm>> (last access 2005-04-20)  
IFLA 研究グループの最終報告書日本語訳 (和中幹雄, 古川肇, 永田治樹訳. 書誌レコードの機能要件. 日本図書館協会, 2004, 121p. <国立国会図書館請求記号 UL631-H9> ) 参照。
- 3) ベイツの提言。LC からの委託を受け, カリフォルニア大学の Marcia J. Bates が報告したレポート「図書館目録とポータル情報における利用者アクセスの向上」(最終報告は 2003 年 6 月)。主題検索の困難解消に, 利用者語彙の構築や関連する書誌レコードのグループ化等を提言。  
<<http://www.loc.gov/catdir/bibcontrol/2.3BatesReport6-03.doc.pdf>> (last access 2005-04-20)
- 4) 橋詰秋子. 米国にみる「新しい図書館目録」とその可能性 - ベイツレポートを中心に. 現代の図書館. vol.41,no.4, 2003.12, p.222-230. <国立国会図書館請求記号 Z21-8>
- 5) Mann, Thomas. "[ch.] 8 The Principle of Least Effort . Library research models : a guide to classification, cataloging, and computers. Oxford University Press, 1993, p.91-101. <国立国会図書館請求記号 UL735-A3>
- 6) Faceted Application of Subject Terminology の略。ウェブ上の資源を, 件名から検索できるようにするために開発された索引語の体系。OCLC のプロジェクトであり, LCSH をベースに開発されている。  
<<http://www.oclc.org/research/projects/fast/default.htm>> (last access 2005-04-20)
- 7) 文献的根拠。ここでは, ある件名に対して, それに該当する資料が必ず存在すること。
- 8) 米国の学校図書館, 小規模な公共図書館で広く利用されている件名標目表。1923 年に List of Subject Headings for Small Libraries 第 1 版が刊行され, 第 6 版からタイトルを Sears List of Subject Headings と変更。最新版は第 18 版。  
Sears List of Subject Headings 18th ed. H.W.Wilson, 2004, 804p.

- 9) scope note . 件名標目表において特定の件名標目について，使用範囲の限定，類似する件名標目との使い分け，使用に当たっての注意などを注記したもの。
- 10) 国立国会図書館件名標目表の改訂について．全国書誌通信．no.118, 2004.6, p.13-14.  
< 国立国会図書館請求記号 Z21-827 >
- 11) 第4回書誌調整連絡会議記録集参照。  
国立国会図書館書誌部編．名称典拠のコントロール．日本図書館協会，2004，161p.  
< 国立国会図書館請求記号 UL631-H11 >
- 12) 国立国会図書館メタデータ記述要素（平成13年3月7日策定）  
< <http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/ndlmeta.pdf> >（last access 2005-04-20）
- 13) Dublin Core Metadata Element Set, Version 1.1: Reference Description.  
< <http://dublincore.org/documents/1999/07/02/dces/> >（last access 2005-04-20）
- 14) 第70回国際図書館連盟（IFLA）大会，分類・索引分科会（Classification and Indexing Section）開催プログラムのページ参照。（145.Classification and Indexing）  
< <http://www.ifla.org/IV/ifla70/prog04.htm> >（last access 2005-04-20）
- 15) 国立国会図書館件名標目表2004年度版（暫定版）参照。  
< [http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/ndl\\_ndlsh.html](http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/ndl_ndlsh.html) >（last access 2005-04-20）
- 16) 日本国内の出版者を網羅する，新刊書流通市場で入手可能な書籍の目録。2002年版より『出版年鑑+日本書籍総目録 CD-ROM』（年1回刊）としてセット販売を開始。  
日本書籍出版協会，出版年鑑編集部編．出版年鑑+日本書籍総目録2004．日本書籍出版協会，出版ニュース社（発売），2004，2冊．+CD-ROM1枚．< 国立国会図書館請求記号 YU7-H2154 >
- 17) 学校図書館の充実発展と青少年読書の振興を図るために1950年設立され，1998年社団法人全国学校図書館協議会（Japan School Library Association）に改組。  
全国学校図書館協議会[編]．学校図書館 速報版．全国図書館協議会，[1954]-.  
< 国立国会図書館請求記号 Z21-188 >
- 18) 全国学校図書館協議会件名標目委員会編．中学・高校件名標目表 第3版．全国学校図書館協議会，1999，19,337p．< 国立国会図書館請求記号 UL642-G6 >
- 19) 全国学校図書館協議会件名標目委員会編．小学校件名標目表 第2版．全国学校図書館協議会，2004，303p．
- 20) 言語工学研究所編．シソーラス活用辞典99年版改訂版:for Windows98/95/NT4.0.  
アスク，1999，CD-ROM1枚．
- 21) 出版ニュース．出版ニュース社，1946-．< 国立国会図書館請求記号 Z21-164 >
- 22) 北克一，村木美紀．「中学・高校件名標目表第3版」と「基本件名標目表第4版」の比較考察--構成規則構造と変換・包摂の検討．図書館界．vol.55,no.6, 2004, p.266-277.  
< 国立国会図書館請求記号 Z21-131 >
- 23) faceted classification. 資料の主題を基本要素に分解し，それを一定の基準に従っ

て合成して複合主題を表現する分類法。

24) ontology . 知識の基本概念および語彙の体系の意。

25) 国立情報学研究所メタデータ共同構築事業。

平成 14 年度より学術情報の流通を目的に、国内の大学・研究機関等が保有するインターネット上の学術情報資源のメタデータをデータベース化。平成 15 年(2003 年)5 月現在、197 機関が参加、データ数は約 6 万件。NII 学術コンテンツ・ポータル GeNii (ジーニイ) より、大学 Web サイト資源検索を試験提供版として公開中。

<<http://ge.nii.ac.jp/genii/jsp/index.jsp>> (last access 2005-04-20)

事業の詳細は、平成 14 年(2002 年)「メタデータの書誌調整」をテーマに開催した、第 3 回書誌調整連絡会議の記録集の報告を参照。(国立国会図書館編。ネットワーク系電子出版物の書誌調整に向けて：メタデータの現況と課題。日本図書館協会、2003、128p.

<国立国会図書館請求記号 UL631-H6> )

26) Medical Subject Headings. 米国国立医学図書館(National Library of Medicine :NLM) が作成する医学分野のシソーラス(約 18,000 語)。MEDLINE(世界最大の医学文献データベース)検索の辞書としても使われている。

<<http://www.nlm.nih.gov/mesh/meshhome.html>> (last access 2005-04-20)

27) Getty Institute (米国) が作成する芸術・建築学分野のシソーラス(約 50,000 語)。

<[http://www.getty.edu/research/conducting\\_research/vocabularies/aat/](http://www.getty.edu/research/conducting_research/vocabularies/aat/)>

(last access 2005-04-20)

28) 図書館流通センターの図書館向け検索支援システム。

<<http://www.trc.co.jp/trc-japa/pr/tooli/01.htm>> (last access 2005-04-20)

29) 分類・索引分科会。IFLA の書誌調整部会(Division of Bibliographic Control)を構成する四分科会のうちのひとつ。

30) カッター(C.A.Cutter,1837-1903)が考案し、サンボーン(K.E.Sanborn)が改良した著者記号表。

Cutter-Sanborn three figure author table Swanson-Swift revision. Distributed by H.R.Hunting Co., 1969, 34 p. <国立国会図書館請求記号 YP21-6>

31) NII 学術コンテンツ・ポータル GeNii (ジーニイ)を構成するコンテンツのひとつ。人間の思考方法に近い検索技術「連想検索機能」を使った効率的な検索が特徴である。(注 25 参照)

32) 国立情報学研究所のサブジェクト・ゲートウェイ協同構築実験プロジェクト。メタデータ・データベース共同構築事業の参加機関が発信する学術情報資源を、主題情報を付してデータベース化し、二次利用できるようにする計画。

<<http://www.nii.ac.jp/metadata/usg/index.html>> (last access 2005-04-20)

33) 国立国会図書館所蔵の明治期刊行図書を閲覧するデータベース。明治期刊行図書(約 168,000 冊)を対象に調査を行い、著作権の保護期間が終了した資料、また著作権者の

許諾を得た資料からデジタル化し、順次公開している。

<<http://kindai.ndl.go.jp/index.html>> (last access 2005-04-20)

- 34) Web Archiving Project (インターネット資源選択的蓄積実験事業)の略称で、インターネット上の情報資源を文化資産として将来のために蓄積・保存する実験事業。

<<http://warp.ndl.go.jp/>> (last access 2005-04-20)

事業の詳細は、平成 14 年(2002 年)「メタデータの書誌調整」をテーマに開催した、第 3 回書誌調整連絡会議の記録集の報告を参照。(国立国会図書館編. ネットワーク系電子出版物の書誌調整に向けて : メタデータの現況と課題. 日本図書館協会, 2003, 128p. <国立国会図書館請求記号 UL631-H6> )

- 35) 今後の国立国会図書館の電子図書館サービスの具体的方向と実現に必要な枠組みを示したもの。

<[http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/elib\\_plan2004.html](http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/elib_plan2004.html)> (last access 2005-04-20)

- 36) 世界最先端の IT 国家を目指して、日本政府が重点施策をまとめた計画。

<<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/it2/kettei/ejapan2004/040615honbun.html>> (last access 2005-04-20)

視覚障害その他の理由でこの本を活字のままでは読むことができない人の利用に供するために、この本をもとに録音図書（音声訳）、拡大写本又は電子図書（パソコンなどを利用して読む図書）の作成を希望される方は、国立国会図書館まで御連絡ください。

連絡先 国立国会図書館総務部総務課

住所 〒100-8924 東京都千代田区永田町 1-10-1

電話番号 03-3506-3306

第5回書誌調整連絡会議記録集

件名標目の現状と将来

- ネットワーク環境における主題アクセス -

---

2005年6月30日 初版第1刷 発行

編集 国立国会図書館書誌部

〒100-8924 東京都千代田区永田町 1-10-1

Tel 03-3581-2331 内線(25120)

印刷 中央印刷株式会社

---

ISBN 4 - 87582 - 619 - 2

本文用紙は再生紙を使用しています